複雜なる光景を想像せしむること蕪村が大力量を見るに足る。虚子の「住まばやと思ふ」と長く言ひてしかも其事件の比較的に單純なるに比すれば、伎倆遙に勝れり。

客觀的時間の句は虚子の如き者を蕪村集中にも見出だす能はず。稍〻之に近き者を求むれば

むくと起きて雉追ふ犬や寶寺　蕪村
鮒つけてやがて去にたる魚屋かな　同
蛇を截つてわたる谷路の若葉かな　同
うき我に砧打て今は又止みね　同
夜桃林を出で〻曉嵯峨の櫻人　同

の如し。

未來の想像を以て時間とする事の哲學上に於て不理なるが如く、過去を客觀的主觀的の二種に區別することも亦不理なるを免れず。接續したる現在といへども後の現在より前の現在を見れば過去と言ふべきこと當然なればなり。便宜のためにこゝに區別したる主觀的時間とは俳句に現はれたる過去と現在との間は幾多の(句中に現はれたる過去又は現在の事件と全く關係なき)事件のはさまりたる如く感ずる場合をいふのみ。故に兩者の中間に在るが如き句も時に之れ無きに非ず。

きのふ去にけふ去に鴈のなき夜かな　蕪村

といふ句は兩者いづれに屬すべき。

大和を巡り伊勢に出でこゝに春暮れぬ

といはゞ兩者いづれに屬すべき。然れども吾人は極端を取りて便宜上に區別したる者、固より區別し得られざる者を強ひて區別するの必要無し。讀者惑ふ莫れ。

(十一)

虚子が成したる特色の一として見るべきは此外に人事を詠じたる事なり。俳句は

元と簡單なる思想を現すべく隨つて天然を詠ずるに適せるを以て元祿に在りて既に此傾向の甚だしきを見る。明和安永に至り蕪村は別に一機軸を出だし俳句の趣向として天然を取ると共に人事をも取り、しかも其點に成功するを得たり。虚子の成したるは特に蕪村よりも一歩を進めたるなり。一歩を進むとは蕪村が爲さゞりし所を爲したるの謂にして主として趣向の復雜なるをいふ。前に擧げたる時間的の句も亦此に屬すべき者多し。(句調はこゝに言はず)

複雜なる人事を俳句中に收めんとしたる結果は具象的の叙述を用うる能はずして抽象的の叙述を用うるに至れり。例へば

屠蘇臭くして酒に若かざる憤り　虚子
老後の子賢にして筆始めかな　同
年の暮の盗人に孝なるがあり　同
先生や易吉にして饅を得たり　同
自炊して鴈來紅を見あきたり　同
寺に幽せられて庭の芙蓉に悲む　同
大なる竈蟀鳴いて用ゐざる　同

の句にて「酒に若かざる憤り」「老後の子賢にして」「孝なるがあり」「易吉にして」「自炊して」「寺に幽せられて」「用ゐざる」等皆抽象的の語にして古來殆ど全く用ゐざりし趣向なり。

客觀の事物は成るべく具象的に卽ち印象明瞭に現してこそ美を感じ得べきに却つてこゝに虚子が抽象的にものしたるは前の時間的の句と同じく俳句の短所を成るべく巧にものし得たるに過ぎず。故に俳句の世界より見れば其區域を擴めたる者にして俳句の一進歩と見るべく、從つて虚子の功も亦大なりといへども、由來無味に傾き易き性質を帶びたる趣向の今後長く繁榮すべくも思はれざるなり。

虚子の人事を詠ずる必ずしも抽象的ならざるも亦複雜なる人事又は新奇なる主觀

を現さんとせり。人事ならずして天然を詠ずるにも亦新奇を好み、殊に複雜の點に於て新奇ならんとせり。

妾宅や雪掃かで門を鎖したる　虛子
下宿屋や凩窓を吹くニつばん　同
裏戸出て鉈とぐ人や星月夜　同
蓮の實の飛んだあとへ蜂はいるべう　同
稻妻の舟沈まんとして今や在り　同
寶塔の鈴落ちて響く春の庭　同
鮓賣る家に草鞋乞ひ得つ五月雨　同
駄菓子店に鮓問へば無しと答へけり　同
いくさに馴れて鮓賣りに來る女かな　同

新奇と言ひ陳腐と言ふ、比較上のことなり。且つ新奇と感じ陳腐と感ずる程度は各人相異なるを免れず。同一の句なり、甲は陳腐なり乙は陳腐ならずといふ。是れ主として其人の經歷の相異に因るものなりといへども其人の好惡にも因るが如し。俳句(其他の文學)を多く見たる人の陳腐を感じ易きは常にして、开は類似の趣向を屢〻見たるがためなり。俳句を多く見ぬ人の陳腐を感ずること少きは類似の趣向を見ざりしがためなり。好惡に因るとは此とは全く別にして、好む所の趣向は屢〻類似の句を見るも猶陳腐に感ぜず、好まざる所の趣向は稍〻似たる者を見ること再度にして既に陳腐の感を生ずるが如きをいふなり。(分析的の知識の多少によりても亦差あり)

又趣味を以て勝る趣向は陳腐に感じ難く、奇警を以て勝る趣向は陳腐に感じ易し。是れ人に因る相異にあらずして句の種類に本つく相異なり。

虛子碧梧桐が多少の新機軸を出だしたるは古來在りふれたる俳句に飽きて、陳腐ならぬ新趣向を得んと渴望せし結果なるべし。而して世には之れを非難する人多

し。之を非難するに其句の無味なるを以てする者あり、こは美の標準を異にする者なれば論ぜんやう無し。之を非難するに徒に新奇を好むを以てする者あり、こは多く俳句(文學)の經歷少き人にして其非難は寧ろ自己の無學より起る。知らずや俳句は將に盡きんとしつゝあるを。知らずや二人の新機軸を出したるは消えなんとする燈火に一滴の油を落したるものなるを。

(十二)

盧子碧梧桐の俳句を見て世人が(俳句を知らぬ人迄も)先づ異樣に感ずるは其句法と用語とが從來の俳句に異なりたることなり。其相異を分析して言はゞ

第一　五七五の調を破りたること

第二　十七字以上の句を作ること

第三　漢語を用ゐ又は漢文直譯の句法を用うること（洋語を用うることもあり）

第四　助辭少くして名詞形容詞多きこと

第一と第二とは同時に來る場合多し。

古來より十七字以上の句、漢語を用ゐたる句抔少からねども二人のはそれよりも猶程度を進めたるなり。斯く句法の變化するに至りたる原因を尋ぬれば

古來ありふれたる五七五調に飽きて新調を得んと欲したること

複雜なる趣向を詠ぜんとしたること

印象を明瞭ならしめんとしたること

新事物を詠ぜんとしたること

の四箇條に歸すべきが如し。

舊に飽き新を望むは人情の常なり。況して比較的に多くの俳句を見、比較的に多くの俳句を作りて單調に飽きたる二人が、月並宗匠連の如く古例を尊崇せず却つていづこにか古人未開の地を得て自己の詩想を花咲かせんとする二人が、今日に

在りて此新調を成すは固より怪むに足らざるなり。

複雑なる趣向を詠ぜんとしたることは前にも言へるが如し。趣向複雑なれば文字自ら多くなること論を俟たず。文字多くなれば五七五の調は自ら破るゝなり。且つ複雑なる事を現さんとすれば短き言語、短き句法を用うるの必要あり。漢語及び漢文法は此必要に應ずるために用ゐられしなり。助辭少くして名詞多きもこれがためなり。

印象を明瞭ならしめんとしたることも前に言へり。印象を明瞭ならしめんとすれば其客觀の光景中に在る者は成るべく多く之を現さゞるべからず、又た其事物の位置と形狀と運動との模樣は成るべく細かに之れを言はざるべからず。さてこそ自ら文字多くなれるものなれ。さてこそ助辭少なくして名詞形容詞多くなれるものなれ。

明治時代の新事物の名稱には漢語(又は洋語)を用うること多し。故に其事物を詠ぜんとすれば勢ひ漢語を用ゐざるべからず、從つて漢語の多きを致すなり。然れども新事物を詠ずるは二人の創始する所に非ず、此一箇條は此論には關係少し。(新事物を詠ぜんと試みたるは鳴雪も吾も碧虛二人に先だてりと覺ゆ)。

例句は多く前に擧げたりといへども猶ほこゝに數句を補ひつ。

植込のつゝじ山吹姫小松　碧梧桐
桃の木や土黑うして麥の畑　同
鶯や押上町の家の梅　同
夏木立深うして見ゆる天王寺　同
涼む子等床几舁き行く川の中　同
强飯や暮秋人稀に野の小店　同
松虫や道旅にして友死したる　同
爭ひは白菊分つ黃菊かな　同

植込の句の名詞多き、土黒うしてといへる形容の細なる、鷺の句の名詞多き、皆印象を明にしたる者なり。

夏木立の句の「深うして見ゆる」と八字に長くしたるは或は不必要なりとの評もあらん、「深く見ゆる」と短く言ひて可なりとの説もあらん。されども此句は「深うして」と長く言ひて始めて此句が現さんとする印象を明瞭ならしむるなり。言ひ換ふれば「深く」といひたると「深うして」といへると少し異なりたる光景を示すなり。并は「深く」といふよりも「深うして」といふ方、木立が一層深く見ゆることにして、此場合には一層深く見ゆる方、趣味多し。蓋し俳句の趣向が包含する空間の廣狹は、自ら其空間を現すべき文字が占め得たる空間の廣狹、又は其空間を現すべき言語が占め得たる時間の長短と關係あり。「深うして」と文字を多くし聲を永くすれば趣向中の空間も自ら廣く深く見ゆるやうに感ずるなり。

涼む子等の句は名詞多く句法詰まりて印象明に、强飯の句は稍〻複雜なる趣向を詠じたるために長句法を取れり。

松虫の句は「道旅にして」といひ「友死したる」といひし句法新奇にして碧虛二人屢〻之を用う。「旅にして」と許り言ひて可なり、「道」の字は不用なりとの説もあるべけれど、こゝには道の字尤も必要なり。若し旅にして友死すとのみ言はゝ同行の友が旅籠屋にて死したるか、或は己は遠地に在りて旅行中の友の訃に接したるかの事となるべし。此句意は旅路を歩行きつゝある間に道にて同行の友が死したるを謂ふものにして「道」の一字あるがために爾か聞ゆるなり。(此趣向は謠曲松虫を其儘詠じたる者故趣向の上には些の手柄無し)又「友死したる」と言はずとも「友死す」と言はゞ可ならんとの説もあらん。此説も善からず。若し「友死す」とのみ言はゞ友の死といふ客觀的の一事が此句の眼目となるべし、されど死其事は不快の感を起さしむるのみにして眼目とすべきに非ず。此句の趣味は友の死後哀を催して何となく友を慕ふ處に在る者にして、其の死後の悲嘆を言外に含めるためには

「死したる」と言を長くし且つ「たり」と言ひ切らずして「たる」と（後に物ありけに）言ふことの必要を見る。

爭ひはの句、句法極めて新にして碧梧桐の創造に掛る。此一句にても同人の句の詰まり加減を知るに足る。

（十三）

虚子の例句（文字多き者等）も前に擧げたるが如し。猶數句を擧げんか。

狼をばかして狐暮るゝ春　虚子
爐塞いで師の坊來まずあいそなき　同
翠帳にたきものす春の恨かな　同
鮒鮓や膳所の城下に浪々の身　同
土橋越えて蝙蝠多き町はづれ　同
夕立や海樓に早く灯をともす　同
高き窓に芭蕉婆娑たる月夜かな　同
萩刈つて菊をあはれむ小庭かな　同
菊に燭して誰何す童子唐服す　同
垣を成す木槿菊など取り合せ　同
大なる鍋の底に河豚を煮つゝあり　同

狼の句は虚子が一種の理想を見るに足る。碧梧桐は此種の句を作らず。「暮るゝ春」といふが如く下五字の上に三字の動詞（又は形容詞）を置き下に二字の名詞を置くは虚子の好んで用うる句法なり。爐塞の句あいそなどいふ俗語を用ゐ人事を言ひこなしたる處新奇にして虚子の伎倆を見るに足る。翠帳の句、「たきものする」と言はずして「たきものす」と言へるは漢文より來りし句法なり。此句法は蕪村の始めたるものならんを虚子多く之を用う。一字のことなれども之を省けば俳句の上には都合善きこと多し。

鮒鮓の句、浪々の身と名詞止の六字にしたるために句調稍重くるしく感ぜらる。只全句名詞ばかりを以て埋め一字の省き得べき者無きを見れば此趣向には此句法必要なる者にして作句の拙とは言ひ難し。殊に浪々の身とは用ゐ馴れたる成語なるをや。要するに此句新奇を以て勝る者名句にはあらず。

終り六字にても「夏衣いまだ虱を取り盡さず」と言ふが如く動詞を用ゐたる者は名詞止の如く句調重くるしからず。蓋し動詞の語尾は之を讀むに捨て聲を用ゐ、名詞は特に力を入れて讀むがためなり。

土橋の句、土橋と町はづれとを以て場所を定めたる上に蝙蝠多きと形容したる處印象をして明瞭ならしめたり。普通に「蝙蝠や」といへる如きも強ち蝙蝠一つの意にてはなけれども一つとも多くとも言はざるために印象は明瞭ならず、只蝙蝠に對する普通の趣味を喚起するに止まる。こゝに蝙蝠多きと形容したるは左迄の手柄無きやうなれど俳句中の蝙蝠にいまだ多きことを形容したる者を見ず。又一の注意ずべき點は「越えて」の語なり。碧梧桐をして此光景を詠ぜしめば土橋と町はづれと蝙蝠多きことのみを言ひて一幅の畫となすべきを、盧子は「越えて」の一語を挿みて繪畫以外の働を現せり。是れ盧子の特色なり。

夕立の句、海樓といふ漢語を用ゐたるは此趣向を言ふに此簡單なる語の必要なるがためなり。海樓の語を試みに日本語に直さんとすれば「海邊の高殿」といふ程の長き文字を使はざるべからず。是れ俳句には出來難きことなり。

高き窓の句、「高き窓に」と六字にしたるはことさらなるが如く感ずる人あるべし。されど此句は斯く言はねば面白からぬなり。先づ趣向より言はんに、高き窓と限りたる故に六字にもなるものなれば他の窓にしては如何、といふ人もあるべけれど、开は徒に此句を平凡ならしむるに過ぎず。高からぬ普通の窓とすれば趣向の陳腐なるのみならず容易に見得るがために又長時間見つゝあるがために興味を薄からしむ。「高き窓に」と言はれて何事かあると仰げば始めて婆娑たる蕉影を見と

めたる處に興味深きを覺ゆ。且つ特に注意して仰ぎ見るために一層印象を明瞭ならしむるの功もあるなり。又た句法よりいふも句の初めに窓のことをいふは人をして其窓に何事かあると注意せしむるために必要なるべく、又「窓に」と「に」の字を置くことも印象を明瞭ならしむるために必要ならん。試みに「窓高し」「窓高く」「窓高み」等の語を置き換へて一誦せよ、印象の極めて不明瞭なるを見るべし。

萩刈つての句、時間を含みたるは虚子得意の所なり。菊に燭しての句は漢語と漢文の句法とを極端に用ゐたり。垣を成すの句も亦「垣を成す」の語は漢文の句法にして普通に下に置くべきことを此の如く上に置きたるも俳句には珍し。

大なる鍋の句、大なる鍋は大鍋と短く言ひて可なりとの説もあらん。此説非なり。大なる鍋と長く言へば鍋殊に大きく見えて且つ鍋の大なる處が此の句の主眼と爲る。鍋大ならざれば此句些の趣味無く、鍋の大なるが主眼とならざれば此句の趣味其半を減ず。「大なる」と言ひ「底」と言ひて始めて印象明なり。（碧梧桐の句「夏木立深うして見ゆる天王寺」の解説參照）

（十四）

鳴雪曰く虚子が作る所の句虚栗に似たりと。然り。句法を言へば似たる所あり。趣向は全く異なり。今虚子の句中特に十七字以上の者を取りて其句調の類例を古句に求むるも亦一興なるべし。

鮒鮓や膳所の城下に浪々の身　虚子

の如く五七六の句法にして且つ名詞を以て止めたる古句の二三を擧げんに、（句の下に（虚）とあるは虚栗集なり）

雪の犬箒に泣くや姨捨山（虚）四友
富士も伏す涼の床や鏡が浦　三千風
鶯や翠簾から透いて烏帽子の影　孤帆
初茸や鵙の草莖家路の暮　調和

稲妻や山城の山河内の河　几董

の如きはあれど「浪々の身」といふが如く一字の名詞を以て止めたる例は見當らず。

大なる鍋の底に河豚を煮つゝあり　虚子

の如く五九五の句調を成す者は、(句の下に(田)とあるは田舍句合なり)

金藏のおのれとうなるなり霜の聲(田)其角

町神樂店前の日影をかつらとし(田)同

雛丸が夫婦や桃の露不老國(虚)羊角

錦その涙に洗ふべし時鳥(虚)才滴

紫の暮山に紅の時雨かな(虚)子堂

枯枝に鴉のとまりけり秋の暮　芭蕉

枯野かな雪くれに寢て見ん不二の味　言水

など多かれど「鍋の」「底に」「河豚」と三字づゝに分れたる者虚子の句の如きはいまだ見當らず。

丸き窓に灯をともしたる芭蕉かな　虚子

の如く六七五の句は古來無數なれども六文字の初の三字を形容詞とし次に二字の名詞を置き次に「に」と置きたる句は一首も見當らず。而して虚子には此の句法最も多し。

櫻色に空さへとづる木末かな(つくば)

消えし雪の河鮎を弔ひけり鰹(虚)雷虫

など稍似たれども猶異なり。

掬べば濁る淺き清水に値遇の緣　虚子

の如く七七五の調を成す者は

遊人去つて晝の櫻を舞狐(虚)子　堂

精進すなといはれし親の彼岸かな　來山

などあり。されども初七字虚子の如く動詞許りを置きてしかも働かせたる者を見ず。

駄菓子店に鮓問へば無しと答へけり　虚子

の如く六八五の調を成す者は

いと涼しき大とこなりけり法の水　梅翁

つゝじ活けて其陰に干鱈裂く女　芭蕉

水雞聞けと導ける僧もなつかしき　士期

常に見たき隣こす茨花最中　舞客

などあれども「駄菓子店に」といふが如く初六の終りに「に」の字を置きたる例なし。

花に豆腐味噌買ふことを忘れ男　虚子

の如く六七六の調はめづらかに聞ゆれど虚栗前後には此例に乏しからず。其中二三を擧げんに

月の秋に生れ出づるや桂男　重頼

榎古りて蔦を鱗の龍紅る（虚）羊角

狼より漏ぞおそろし虎が涙　貞之

北へ出れば東へ出れば花のなんの　鬼貫

亂酒の僧見よや柚べしの責を受る　杉風

の類あり。

怒濤岩を嚙む我を神かと朧の夜　虚子

の如く八七五の調を成す者も例に乏しからず。

いちご折る娘いつ山吹の香に馴れし（虚）言　弓

御廟年を經て忍ぶは何を忍草　芭蕉

よしや花の雨此杯を笠にせん　一笑

の類なり。

大なる霞ころがりて椽に消えざる　虚子

の句は五八七の三句に切るべきかと思へど句切たしかならず。細かく分てば五三五七の調なり。此調を求むるに古句無し。

摺鉢の早苗穂に出る秋こそあらめ（田）其角

の句の「出る」を「いづる」と三字に讀めば虚子の句に似たり。

夕嵐青鷺吹き去つて高楼に灯　虚子

の如く五九六の調も古例を見ず。若し

内裏雛人形天皇のはじめとかや　芭蕉

の句の人形を四字に讀めば五九六の調を成せども人形は「にんぎやう」と讀むべきか「にんぎよ」と讀むべきかさだかならず。

削れる如き山疊める如き雲の秋　虚子

の如く九七五の調を成す者は意外に多し。

火燵のうたゝ寐や夢に眞桑を枕にす（田）其角

六尺袴着て塵見かへらじ松の門（虚）千春

影恨むや毛虫刈葱隱れの溜り水　杉風

角や句に敵なし十年過ぎても梨の花　淡々

など是なり。されど單に九七五の調をなすのみにして全體の結構虚子のに似るべくもあらず。

寺に幽せられて庭の芙蓉に悲む　虚子

の句は最も文章に近き者にして殆ど句切の切りやうもなし。斯の如き例は稍似たる者をさへ見ず。

（十五）

俳句の定義如何と問はゞ、俳句は文學の一種なりといふことの外に、他の文學と區別すべき特色は五七五的の調子に在りと答へざるべからず。五七五的の調子は實に俳句の最大要素なり。然れども五七五とは其最も普通なる調子をいふものにして俳句は此調にのみ限られたるにはあらず。之を古句に求むるも十六字句あり、十八字句乃至二十五字句あり、十七字句にても七五五又は其他の異調あり。十八字句は十七字句に續いて最も多し。何時の代の俳家も多少之を作りたり。十八句に續いて多きは十九字句なるべし。此外は皆極めて少し。

極めて長き句を作り出でたるは宗因にして檀林一派之を學ぶ。(寛文延寶) 後其角田舍句合を作り杉風常盤屋句合を作り稍檀林を變ぜんとす、しかも其句は檀林よりも尚長し。是れ俳句最長の時代なり。(延寶末年)それより二三年にして其角虚栗集を編む。其句の長き田舍句合と略ゞ同じ。只此は漢語を多く用ゐたり。是れ所謂正風なる者の種子にして俳句の最も佶屈を極めたる時代なり。(天和) 芭蕉古池の句を詠みし頃より長句廢れて五七五調盛んに行はる。(貞享以後) 是れより後は正風外の人たま〳〵に長句を試る外は殆ど五七五調に限られたるが如く六七五の句さへも極めて少かりき。樗良麥水の徒出づるに及びて虚栗を學びしことありしも眞に一時の變象に過ぎずして廣く影響の及びたるを聞かず。(寶暦明和) 然れども其の結果は虚栗調にもあらず普通の五七五調にもあらざる一種の化合物を生ぜり、之を蕪村曉臺闌更等の調となす。(明和安永天明寛政) 十八字句十九字句等の句多くして且つ其調が佳句を成したるは此時代なり。文化以後再び五七五調に復り、天保以後は六七五の句さへも變調として嫌忌するに至る、爾後明治に至る迄然り。

俳句の調に於ける變遷の大略は上の如し。古例ある者皆俳句なりといはゞ十六字乃至二十五字句盡く俳句ならざるはなし。此說を推し廣むれば今日十四五字句二十六七字句を作り置かば後世に至りて又此等をも俳句と稱すべく終には如何なる

者も俳句と爲り得る譯なり、是れ俳句無きと同じ。或は五七五、六七五位を俳句とし其他を俳句とせざらんか、さらば其他の句を何と稱すべきにや。今迄發句、俳句、句等の普通の名稱の外に特別の名稱を附したる者なし。試に之を俳句の變調と稱せんか、此名稱は一般に是認せられたりとするも猶何處迄を正調とし何處からを變調とすべき、此限界は到底各人の意見一致する能はざるべし。

名は便宜のために設けられたる者なれば便宜のためには之を廢するも可なり、之を改むるも可なり。然れども命名する者なき以上は吾人は俳句なる名を以て古來一度にても詠み出でられたる總ての變調にも冠せんとす。尙更に推し廣めて十四五字より三十字位迄をも俳句といふことあるべし。之を普通の五七五調の俳句と區別する場合には十五字の俳句、二十字の俳句、二十五字の俳句等と稱せんとす。是れ他意あるにあらず便宜のためのみ。

碧梧桐虛子長句を成すに就きて世人或は之を疑ふて俳句といひ得べきか如何と問ふ者あり。故に吾人は自ら之を俳句と稱すべきことをいふ、敢て他人を强ひて之を俳句と呼べとはいはず、要するに名稱は毫も俳句の價値に關する者に非れば重きを置かざるなり。

虛子の句調新奇なるが如きも稍類似せる者あることは前にいへり。其類似の句の田舍句合、虛栗集に多きことも亦前に示したる如し。されば虛栗の句を俳句と言はんには虛子の句も俳句と言ひ得べきか。

ある人曰く俳句漸くに長くなり行かんか、漸くに俳句の範圍を脫して短篇の新體詩とならんと。吾人は實に此傾向あるを認むるなり。俳句專門の人或は此傾向を以て俳句のために悲むべしとなす。然れども吾人は俳句のみを重んずる者に非れば他の文學を俳句の犧牲に供ふる程には俳句に忠ならず。俳句今全く盡きたりとするも吾人は之を悲まず、又それがために今迄俳句を學びたることを悔いず、又一句なりとも俳句殘りあらんには之を學ぶ人あることを喜ぶなり。

（十六）

十七字以上の句を俳句と稱すべきか否かは虚名の問題に屬す。更らに重要なる一大疑問は實質の上より來らん。曰はく碧虚二人の長句が調子の上に於て幾何の價値を有するか、將た之れを從來の五七五調に比して優劣如何と。

調子ばかりに就きて其優劣を較するは吾人の至難とする所なり。縱し其優劣を判じ得たりとするも其調子を伴ひ來る意味の如何によりて多少の變動を免れず。詳に言はゞ甲の趣向にはイの調子を用うるを適當とし乙の趣向にはロの調子を用うるを適當とするが如し。普通の場合にて見れば五七五調は幽玄高古沖澹穩雅自然などいふべき趣向を咏ずるに適し、六七五、七七五、五八五、六八五等の調子は雄壯遒勁奇警莊重活動などいふべき趣向を詠ずるに適す。吾人は五七五調と六七五等の調との間に徑庭を置かずして調子と趣向と相適合したる時の調子はいづれなりとも佳なりと思ふなり。

然れども此論は碧虚二人の新調（調ばかりを云）にも適用すべき論ならず。蓋し二人が五七五調を破りたるは事實なるも二人は只破壞したるのみにして未だ創造の功を奏せざるなり。見よ二人の長句は五七五より長しといふ迄の事にて一定の調子無きに非ずや。是れ二人は德川時代の舊習を打破して未だ明治の新政府を建て得ざるなり。二人或は自ら建て得たりとせん、世人の一部も之を是認する者あらん、吾人は之を是認する能はず。若し二人が强ひてある者を建て得たりとならば無政府を建て得たりともいふべきか。無政府を建て得たりとは謔語にして何も建て得ずといふと同じきなからんや。卽ち俳句を破壞して散文を創立したりといふことにして誰か二人が散文を創立したりといふことを許す者ぞ。

一定の形式を具へざる二人の調子が如何なる趣向に適せるかは固より論すべきにあらず。二人の調子が印象を明瞭ならしめ、複雜なる趣向を言ふに適せりともいはゞいふ可けれども开は調子の上の事に非ずして字數上の事なり。若し字數にの

み就いて言はゞ前の二箇條に適合せしむるには字數の多きほど便利なるは論を俟たず。豈二十餘字に限らんや。三十字可なり、四十字五十字可なり、百字千字可なり、多々いよ〳〵可ならんのみ。

虚碧二人の論若し天下の韻文を焚き盡して世人をして散文にのみ從事せしめんとの事ならば开は文學上の大問題にして俳諧などいへる小題目の下に論ずべき者に非ず。二人に此傾向あるは俳句の上に於て一斑を窺ふべしといへども韻文散文と迄に推し廣めてはまさかに二人もたやすくは肯定する能はざるべし。

既に五七五的の句を厭ひて之を打破したるは其調子を厭ひたるに因るなり。一の調子を厭ひながら他の調子を擇ばざるは散文に近からしめんとするに似たり。既に散文的ならんとして猶二十三四字の内に局束せらるゝは全く韻文を離るゝ能はざるなり。散文たるを得ず韻文たるを得ず是れ何者をも創立せざるに非ずや。吾人の臆測を以てすれば所謂新調なる者は一時の現象に過ぎずして永く繁榮するこ

となかるべし。唯俳句の一變體として存在すべきのみ。若し此體にして俳句として存在することあらば开は今の新調が一變して幾分か韻文に近よりたる後なり。其時には今の新調の句にして合格する者と合格せざる者を生ずるは當然にして不合格の者は終に變體として曉星の如く存するに過ぎざらん。若し此體にして散文として存在することあらば开は幾百萬字もあるべき者を包含する散文の一小部分として存在するに過ぎざらん。進化か退化か消滅か兎に角今の所謂新調は永久なる能はじ。

（十七）

碧梧桐盛子が新調を成して後の弊害は新調に僻するに在り。嗜好の一轉せし時之に僻するは何事にも免れざる所にして二人の之れに僻するは寧ろ當然の事なるべし。傍觀者は又新奇の事に逢ふて異樣の感を爲すが常なれば新奇を以て滿たされたる者を見て人の之に僻するが如く疑ふも亦ありうちの事實なり。前日吾人は二

人の句を見て痛く偏せりと思ひしが今日にては其の偏せりとせし者をも左程に偏せりとは思はざるに至れり、今後亦測る可らず。然れども今日吾人の見る所にては二人は長句に偏し、佶屈なる句に偏し、複雜なる句に偏し、漢語に偏すと言はざる可らず。此等に偏するが故に幽玄高古なる趣向、流暢平易なる句を取らず。』二人と反對の位置に立つ者を鳴雪とす。鳴雪二人に戯て曰く卿等の句甚だ虚栗に似たり。卿等は虚栗時代に後返りたりと。又曰く吾曾て虚栗を讀で謂らく一生此の如く佶屈なる句を唯一の俳句として樂みし人もありしならん、此時代の俳人の不幸憫むべしと、何ぞ圖らん明治の今日卿等の如く佶屈なる句許りを作りて無上の樂と爲す人あらんとはと。又曰く卿等の漢語を好むは漢語珍しきがためのみ、吾等維新前の教育を受け漢字漢書の中に生長せしものは漢語といへば鼻につく心地すなり云々と。一時の笑談に過ぎずといへども亦以て此間の消息を解するに足る。漢語の如き或は然る者あらん。

鳴雪曰く五七五調は正調にして他は變調なり、六七五は極めて正調と接近せり、七七五に至りては既に正調を離るゝこと遠し、蓋し六七五に在りては初句の字數猶中句より少し、七七五は初句中句字數相同じ是れ二者の間特に離隔する所以なりと。鳴雪が五七五、六七五を正調とするは鳴雪の感情を現す者にして之を非難すべくもあらず。然れども六七五、七七五との區別を論ずるは誤れり。若し其論法を推し廣めば一七五、二七五、三七五、四七五の調も七七五に比して正調に近しといはざるべからず。されど鳴雪も爾か思へるにはあらざるべし。六七五は五七五を距ること一歩にして七七五は二歩なるのみ。特に接近し特に離隔するの理なし。五七五、六七五を愛し七七五を愛せずといふは善し。之に理由を附するは誤れり。

鳴雪の句趣味を尚ぶ。造語は寧ろ拙なる方ならん。其句清麗なる者明淨なる者多し。新を厭ひ古を好み活動を嫌ひ靜止を愛す。長所短所皆個中に存す。こゝに其

例句を擧ぐる能はざるを遺憾とす。

碧虛の外に在りて昨年の俳壇に異彩を放ちたる者を露月とす。露月喜んで漢語を用うれども用語自ら碧虛に異なり。

夕風の墓門の櫻花もなし　露月
繽たり紛たり土饅頭を吹く落花　同
登らんせ春は楊州第一樓（送別）　同
一山の堂塔古き若葉かな　同
名月や妻を娶らば正に今宵　同
善き人の登第したり菊の花　同
澁柿や三郎實語教を讀む　同
雁を聞く夜船の底の進士かな　同
白虹日を貫いて螳螂起つ　同
栗はねて山賊の頭領あらはれぬ　同
栗を燒く山賊の妻美なるかな　同
夢に木犀の下美人立てりき　同
明星や神前の紅葉巫の袖　同
末枯や暮雲平らかに奥州路　同
斯の如き瓢に似たる者ありや　同
僧喝す柳は綠唐辛子　同
菊咲いて雨風多き他國かな　同
江を渡り中流にして霰降る　同
鷹狩や日暮れて歸る左賢王　同
君に侑む世に乾鮭も亦風流　同
營に火して單于逃げたり冬の月　同

滿天の雪に楚江を渡るかな　露月
士卒五千匈奴に降る吹雪かな　同

漢詩、漢史より來りし語多く從つて支那の事物を詠じたることも多し。是れ碧虛の知らざる所なり。題目は大なる者壯なる者を取りて句調は多く古調に據る。是れ碧虛と趣を異にする所なり。登第、進士、楚江、左賢王、單于、匈奴等の字俳句に入るは之を嚆矢とす。

（十八）

前に擧げたる露月の句既に尋常に非ず。然れども其一種の理想を含みたる句。

僧死んで月片破れぬ山の上　露月
栗はねて大入道と化けても見よ　同
白馬馬に非ずといへば栗はねる　同
月暈あり鷄頭の影化けぬべく　同
東の方海に入つて海鼠を見たりける　同
覇業未だ成らず海鼠に恨あり　同

の如きに至りては盡く奇怪斬新常人の思ひ得る所にあらず。古往今來未だ此の如き俳句を見ず。露月鬼才あり。其他露月の作る所雄壯なる者警拔なる者には

荒瀧の霧を裂くこと五百尺　露月
曉や湖上を走る青嵐　同
洪水や月を浸して押し寄する　同
鹿どもが藥採らんと行けば鳴く　同
亂を避けてくさびらなんど狩くらす　同
重陽やたま〳〵村會して終に酒　同
はりつめし氷の中の巖かな　同
藥には狸なんども善かるべく　同

狐落す呪文高らかに年の暮　露月

などあり。此等皆露月の特色を見るに足る。又露月の句に歴史的の者あり。例へば

雪沓やをさなき者は主なるべく　露月

榾の火や木曾の冠者の稚き　同

輕々描き去つて雅致を見る。亦是れ一種の伎倆。蕪村より出でたりとおぼしけれど稍異なり。

露月は壯大を好み、奇警を好み、理想を好み、而して他を知らざるが如き不具にあらず。時に柔軟なる雅語を用ゐ、時に微妙なる情味を説く。或は脱兎の如く或は處女の如く、或は鬼神を赫し或は赤子を愛すが如き者、是れ露月の露月たる所以なり。

春の夜や繡したる閨の幕　露月

子は痩せぬ其子の母は此夏を　同

日は西へ詮方もなし秋の蝶　同

蟲鳴くや少將戀の細道を　同

三夜網すたま〳〵得たる鱸かな　同

急げ馬鶉も啼かず日は暮れぬ　同

百舌の聲寺子の聲や申の刻　同

蟀は小さき黒き虫にてありける　同

殘る蚊の悔り難き力かな　同

秋の蚊の泣く〳〵雨に出でゝ行く　同

いが栗をつかまんものとあせりける　同

茸狩にわれ松茸を得んとぞ思ふ　同

野菊なんをかしきものにはありける　同

黒い牛赤い牛居る花野かな　同

笑ましけに鬼灯鳴らす女の子　露月
伸び上り紅葉折らまくほしき女　同
はり〳〵と何やらはねる炭火かな　同
物思ひ居れば湯婆のさめ易き　同

露月沈默寡言迂の如く愚の如し。然れども其句を見れば縱横奔放藻思煥發眞に恐るべき者あり勉めて已まずば造詣する所豈測るべけんや。

露月と曼を對する者を紅綠とす。一は沈默。一は多辯。一は遲鈍にして牛の如く一は敏捷にして馬の如し。性質に於て相反し俳句に於て相反す。然れども其句奇警人を驚かすに至りては兩者或は似たる所あり。蓋し一時經歷を同じうせしためか。

紅綠に一種の理想あり。露月の如く支那的にもあらず壯大的にもあらざれど其奇なる處似ざるにはあらず。

蜊蜆小桶に何を語るらん　紅綠
靑簾蝶と蜘との喧嘩かな　同
鮒桶に猫と鼠の別れかな　同
愚を思へと大なる絲瓜贈りけり　同
長き夜の鼠嫁入などすらん　同
君知るや海鼠は海の鼠なり　同
章魚の戀河豚かいまみし時よりも　同
病は氣から河豚なぞたんと召るべし　同

露月は大に健に、紅綠は小に巧なり。

（十九）

紅綠の句には小景を詠じ瑣事を賦する極めて多し。

引越や車に縛る鉢の梅　紅綠

永き日を膝の小猫の鮮かな　紅緣
凧の尾のぞろりと下りぬ苗代田　同
園の戸に藤からまりて咲きにけり　同
虫籠に蟬を入れたる童かな　同
麥秋や犬にまたがる里童　同
妻を呼び鮒桶の蓋を取つて曰く　同
羽織着て夕涼むなり奥の人　同
涼しさの山見ゆるなり窓の穴　同
夏菊は貧にして且ついさぎよし　同
葉がくれて林檎の赤き西日かな　同
朝な〳〵毛虫の蓑の露衣　同
病葉の毛虫ながらに吹かれけり　同
笹舟に毛虫を流す童かな　同
毛をあらみ毛虫の蓑の濡れがちに　同
夏の別れ茄子の腸黄色なる　同
傘さして籠提げて茄子もぐ女　同
虫ばみて葉も無き茄子の一つかな　同
籠ながら茄子洗ひ居る媼かな　同
麥藁の帽冠り居る案山子かな　同
秋の螢寂寞として光りけり　同
たま〳〵に大なる萩の螢かな　同
進物の菊下葉枯れたるを拂はずや　同
蘆枯れて茶色の小鴨首細し　同
頭巾着て會釋かしこき長者ぶり　同

煤拂や膳に載せたる黒佛　紅緑
麥種の袋まづしきこぼれかな　同
魚店の灯に照られ居る鰒の面　同
腸の燒けて崩るゝ炭團かな　同
いつも〳〵同じ頭巾の地藏かな　同

普通の人ならば尋常の事として見逃すべき者をも紅緑は取つて以て趣味ある詩料とせり。普通の人ならば俳句中の一部分と爲すべき小趣向をも紅緑は全句の趣向として毫も懈弛を感ぜしめず。是れ紅緑の伎倆此點に於てすぐれたるなり。紅緑又多少の滑稽思想を有す。例

牛小屋に牛の留守する田植かな　紅緑
箕に伏せし鼠逃しぬ時鳥　同
太刀佩いて弓持つて正に案山子かな　同
黍の穗に案山子の顏のこそばゆき　同
だらりぶらりとして風の絲瓜かな　同
おのれ澁しと知らでや柿の眞赤なる　同

紅緑常に松窓乙二の調を愛す。故に其句縱ひ乙二調に非るも猶一種異樣の言ひまはしに特色を現したる者少からず。例

蟬飛んで西日かすりぬ杉林　紅緑
破庇南瓜咲く家の田舍めく　同
獨淋しつく〴〵ほうし影法師　同
芒野や月出でんとして風が吹く　同
佗禪師うそ寒さうなうしろつき　同
風吹いて月の出づべき雲明り　同
秋ぞものゝ悲しき月を見てもまた　同

日にあたる黄楊の木は先づ落葉せし　紅緑
人つれなく枯菊と返しこされけり　同

子規に寄す

涼しさのむく〳〵と肥えたまひてや　同

紅緑の特色として見るべきは大略前に擧げたるが如しといへども時に雄健の句、雅正の句をさへ吐くに至りては彼亦た一個の稍完備せる俳人と言はざるべからず此點に於て露月は一歩を紅緑に讓る。雜句

雨一日木蓮きたなくなつてけり　紅緑
さをとめの飯くふて居る焚火かな　同
疫病に田植淋しき小村かな　同
ほつちりと山の尖りの茂りかな　同
刈跡に陽炎立つや麥の畑　同
早稲晩稲同じ流れの水を引く　同
馬の上王昭君が日傘かな　同
ある朝や椽の隙間をいもの蔓　同
天鵞絨の朝顔咲きぬ妹が垣　同
路ばたの木に結ひたる鳴子かな　同
稲妻のはた〳〵と鳴る雲間かな　同
裂け〳〵て稍黄ばみたる芭蕉かな　同
稲妻に三度弓弦を鳴らしけり　同
夜を寒み居眠る人の影薄し　同
島二つ初汐満ちて日の赤き　同
かんかりと紅葉の宿のともしかな　同
八月の大風南より來る　同

馬の背や刈稻の上に乘る童　紅緣
霧雨や山を見上ぐる山の茶屋　同
ひや〳〵と窟の中のともしかな　同
目の上に蕎麥畑白し津輕坂　同
枯菊や葭簀倒るゝ山の茶屋　同
戀は時雨無常は霜とよまれけめ　同
芭蕉より南天遲くしぐれけり　同
枯野越えて更に冬木の中を行く　同
とまり後れ枯野急げば鐘が鳴る　同

山を見上ぐる山の茶屋といふが如く同語を疊むは紅緣の好む所なり。

（二十）

地方俳人の中稍古き者を霽月とす。霽月終始僻地に在りて獨り蕪村を學ぶ。蕪村流の用語と句法を極端に模したる者は實に霽月を以て嚆矢とす。明治廿七年の頃既に特種の調子を爲す。爾來世人は漸く漢語を用ゐ漢文的の句法を用ゐ昨年に至りて稍霽月の特色をして少からしめしが如き觀なきに非るも、畢竟此の如く相近似したるは霽月が主として世人を啓發したる効に非るなきを得んや。霽月初より全く師事する所無し。其造詣の深きは潛心專意古句を讀みて自ら發明する所に係る。畏るべきかな。

勁拔緊密なる俳句は霽月の特色にして永く異彩を放ちし者、一般の俳句が勁拔緊密に赴きし今日と雖も猶霽月の如く勁拔緊密なるはあらざるべし。殊に趣味を深遠に探り材料を新奇に取るは特色中の特色として見るべく、敢て他の模倣を許さず。

其例

殘雪や胡騎長驅して關に入る　霽月

半切や一蝶が畫の涅槃像　霽月
長谷の雲雀扇が谷の雲雀かな　同
行く春や七日の護摩焚きもあへず　同
時鳥雙輪塔に三日の月　同
洛陽の黄塵高し雲の峰　同
蚊柱や雨の木陰の闕腰架　同
烏丸一條下の今日の月　同
南樓に月を見北樓に琴を聽く　同
名月や銅拍子なんど聞ゆ　同
學僕のひたものくふて月見かな　同
名月や金波流れて舟による　同

其外新しき語を用ゐず新しき材料を使はざるも、其配合の妙は讀者をして趣味の清新を感ぜしむること深し。

子雀や連翹にとまり竹にとまり　霽月
須磨の松海から見たる春の雪　同
海棠の雨や鸚鵡のひとり言　同
沫雪や被衣を振ふ二月堂　同
杉垣に花見ゆ寺の後側　同
發句など書かばや春の波の上　同
渦卷いて春の潮落つ四十島　同
畫も啼く炭燒く谷の時鳥　同
袷着て山に對す水のほとり　同
時鳥雨の箱根の甘酒屋　同
一八に雨のふるなり屋根の上　同

雨に濡れて苞の石竹あはれなり　霽月
大杉に凌霄赤き入口かな　同
名月や鶴聞きに行く和歌の浦　同
名月や灯をともしたる膳所の城　同
月見船三味線引いて下りけり　同
三つばんや炎の上の冬の月　同
縄切をもて枯れたる菊を束ねけり　同
散る紅葉鞍馬の杉の木の間より　同

最も初に蕪村を學びたるも霽月なり。最も善く蕪村を學びたるも霽月なり。永機曾て霽月をして第四世夜半亭たらしめんとす。(第一世巴人、第二世蕪村、第三世几董にして夜半亭絶えたり)霽月曰く吾は一個の俳人霽月なり。何ぞ夜半亭を用うるを爲んと。霽月自ら居るの高き斯の如し。此心ありて而して後蕪村以て學ぶ可きなり。

(廿一)

霽月とは何等の關係も無くしてしかも隱然霽月と對峙する者を漱石と爲す。漱石は明治二十八年始めて作る時より既に意匠に於て句法に於て特色を見はせり。其意匠極めて斬新なる者、奇想天外より來りし者多し。

永き日や韋陀を講ずる博士あり　漱石
此土手で追ひ剝がれしか初櫻　同
蘭の香や聖教帖を習はんか　同
累々と德孤ならずの蜜柑かな　同
同化して黄色にならう蜜柑畑　同
日あたりや熟柿の如き心地あり　同
紡績の笛が鳴るなり冬の雨　同

挨拶や髷の中より出る霰　漱石
吉良殿の討たれぬ江戸は雪の中　同
物語る手創や古りし桐火桶　同
立て籠る上田の城や冬木立　同
古瓦を得つ水仙のもとに硯彫む　同

漱石亦滑稽思想を有す。

出代の花と答へて跛なり　同
南瓜と名にうたはれてゆがみけり　同
長けれど何の絲瓜とさがりけり　同
猫化けぬ柳枯れぬと心得て　同

の如し。又漱石の句法に特色あり。或は漢語を用ゐ、或は俗語を用ゐ、或は奇なる言ひまはしを爲す。

冴え返る頃をお厭ひなさるべし　漱石
明月や丸きは僧の影法師　同
作らねど菊咲きにけり折りにけり　同
雞頭や代官殿に御意得たし　同

然れども漱石亦一方に偏する者に非ず。滑稽を以て唯一の趣向と爲し、奇警人を驚かすを以て高しとするが如き者と日を同うして語るべきにあらず。其句雄健なるものは何處迄も雄健に眞面目なるものは何處迄も眞面目なり。

短夜の芭蕉は伸びてしまひけり　漱石
玉章や袖裏返す土用干　同
廻廊の柱の影や海の月　同
酒なくて詩なくて月の靜かさよ　同
底見ゆる一枚岩や秋の水　同

貧にして住持去るなり石蕗の花　漱石

風や海に夕日を吹き落す　同

水仙や根岸に住んで薄氷　同

僧俗のさし向ひたる火桶かな　同

生垣の上より語る小春かな　同

居眠るや黄雀堂に入る小春　同

雑炊や古き茶碗に冬籠　同

箱崎八幡

鹹はゆき露に濡れたる鳥居かな　同

香椎宮

秋立つや千早振る代の杉ありて　同

太宰府天神

反橋の小さく見ゆる芙蓉かな　同

船渡屋温泉

ひや〳〵と雲が來るなり温泉の二階　同

内君の病を看護して

枕邊や星別れんとする晨　同

魏叔子大鐵椎傳

星飛ぶや枯野に動く椎の影　同

（廿二）

霽月漱石と共に立つべき者他方に極堂あり。極堂は巧緻清新を以て勝る。

痩馬に提灯つけて時鳥　極堂

家は皆海に向ひて夏の月　同

燭を取る人影黒し萩の中　同

市の月酒藏の影塀の影　極堂
桶の中海鼠ころげてよりにけり　同
海鼠汝踏みつけるべきつらもなし　同

極堂好んで「を」の字を用う。中には「を」の言ひまはし方極めて珍らしく自家の生面を開く。極堂仲間の人今專ら之を用うるが如し。

筍の竹になる日を風多し　極堂
夕立のあとを小草に入る日かな　同
作られたるを菊の名のものゝし　同
奈良は鹿の鳴かざるを見て戻りけり　同
荒れたるを萩はものゝ下に咲く　同
きりぐ〜す君いのといふを鳴きさかる　同

極堂亦初五文字に代ふるに三字を用う。是れ古今未だ曾てあらざる所なり。例へば

病起婢を呼び僕を呼び春の風　極堂
病起小春の椽に出でつつ　同

の病起の如し。併しこは「病起」と讀みきつて少しく時間を置いて更に次の句を讀むやうにすれば音調に於て五字句と大差無し。作者の意は知らず。又

感あり十二月何日としるす　極堂

の如き初四字なるもあり。

牛伴は學ばずして俳句を善くす亦巧緻なり。句法は成るべくたるみ無きやうに作る、故に「や」「かな」等の切字太だ少し。昨春

藤紫に明けつゝじ紅に夕す　牛伴

等の句を作る。是より「す」の切字流行す。「す」は尤も句のしまりを強くす。

昨年の流行語の中に「日午なり」「何午なり」といふあり。こは昨秋

秋の水湛然として日午なり　鳴雪

といへる句に始まれるなり。

昨年中著き進歩を爲したるは把栗なり。把栗昨春始めて俳句を試み秋冬に至りて既に一家を成す。其趣向多く漢詩より來る。清幽瀟洒誦すべき者多し。亦好んで「午なり」の語を用う。

舟人の魂祭る火や荻の中　把栗
艶れて面して後已む案山子かな　同
東窓また西窓に月を見る　同
鳴子かしましく案山子靜なる夕　同
林間に松蕈を燒く煙かな　同
人去つて鳴子閑なり午の村　同
紅葉深し石雲を吐く處　同
山茶花に霜滴りて庭午なり　同
竹窓を霰打つ夜の夢奇なり　同
小春日さして書卷まばゆき机かな　同
落葉に坐して山見る土手の小春かな　同
試みに踏めば氷の薄きかな　同
枯野十里行き盡して人に遇はず　同

把栗と對峙する者を墨水とす。墨水の句澹泊中に趣味深き處あり。句法も亦平凡にして奇を衒はざる處に雅致を寓す。昨春に至り大に進歩したるが如し。

蔓をもて提る西瓜の覺束な　墨水
名月や子も寢ねであるゝ椽の端　同
三日月は殘して柳散りにけり　同
肌寒やみなし子に乳を探らるゝ　同

朝寒や浪靜なる海の面　墨水
星飛ぶや新涼を趁ふ舟二艘　同
帚木や庭狹うして初嵐　同
しんとして牡丹崩れぬ智恩院　同
夏川や草刈どもがかち渉る　同
美人病めり芍藥半ば凋落す　同
更衣侍の子の人と爲り　同
門涼み遠き花火を見る夜かな　同

（廿三）

蒼苔も昨年中に著く進歩す。其句奇拔なる者又は實景を寫して新鮮なる者多し。

水の上や蜻蛉飛べば蜻蛉飛ぶ　蒼苔
蜻蛉や拔きそろへたる劍のさき　同
蔦青き小使部屋のうしろかな　同
朝寒み小鳥ヒンクワッッウと鳴く　同
落葉がら〳〵饅頭なんど賣る小店　同
藪陰や小瀧氷りて山家あり　同
化鳥飛んで谷間の冬の日は暮れぬ　同
冬枯や梟養ふ野の小家　同

肋骨も夏より秋にかけて俳境に一歩を進めぬ。冬に至りて稍新調を學ぶ。

鐮立て〻螳螂こちら向いて來る　肋骨
初汐や小さな舟が沖を行く　同

其村東雲左衛門の三人は鼎立の姿なりしが其村はじめに上達し東雲次に上達し、左衛門最後に上達す。其村漸く進んでそれより後進まず。左衛門將に或は進まんとす。其村は趣味の深き處を解せず、眼前の瑣事却て人の道破せざる處を詠ず。

繪日傘を異人の子供さして行く　其村
三尺を前でしめたる浴衣かな　同
妄執をそりこぼちける罌粟の花　同
名匠の杉戸に畫きし牡丹かな　同
歸省する遊子夏野を通りけり　同
名びろめの袱紗に染めし牡丹かな　同
四辻や衣がへして巡査立つ　同
夏草や五町四方の官有地　同
冬木立十四五軒の小村かな　同

東雲の句は其村に比して稍曲折多し。

宮の前の川に銀杏の落葉かな　東雲
洲の中の雜木紅葉して水光る　同

置く霜の白きが中を水氷る　同
しぐるゝや辻の地藏の眞面目なる　同

左衛門は口を衝いて立どころに數百句を成す。句法趣向共に無造作なれどもなかなかに俗氣少し。

宰相は牡丹の君と申しけり　左衛門
青簾琴曲指南所なり　同
足洗ふべからずとある清水かな　同
風の吹くだけ吹いて空白し　同
蕎麥を刈り麥を蒔く道の左右　同
行く年を京の伯母御にかゝりけり　同
乞食老いて凍ゑ死にけり人の檐　同
ひよと浮いて啼き〳〵泳ぐ小鴨かな　同

河豚汁に何なく蠣にあてられぬ　左衛門
此頃は海鼠ばかりと申しけり　同
置炬燵物書かんとて寐入りけり　同
片側の柳枯れたるお濠かな　同
子守子の麥蒔く方へ歌ひ行く　同

高田屋二句

けさの雪盧子市に蓑を得しや如何に　同
よく笑ふ其村此頃年の暮　同

根岸庵二句

草枯の萩と申すもあはれなり　同
冬枯と題すべき庵となりにけり　同

四方太繞石深く斯道に悟入する所あらんとす。鼠骨秋竹亦侮り易からず。花叟、曳柳、別天樓、愛櫻子、月人、靈子、燕子、無事庵等各進歩せざるはなし。

喰へもせぬ茸澤山生えにけり　花叟
うか〳〵と稲妻光る月夜かな　同
井伊様の行列赤し秋の雨　同
ありやせこりやせと踊る浮世の面白や　靈子
況んや盥輪朽ちて坐上さみだるゝ　同
月涼し本郷更けて芝へ迄　同
源八を渡れば菜種ばかりかな　別天樓
五月雨や湖水にのぞむ一軒家　同
柴舟に上蔦載せて春の川　同
望夫臺に登れば長し春の雲　無事庵
牡丹伐つて蜂にさゝれし小僧かな　同

此秋は彼岸日和のつゞきけり　無事庵
のどかさや鶴九皐に舞ひ上る　叟柳
若竹や我に茶室の好みなし　同
黒谷の方は月夜を霞ふる　同
釣鐘に花の夕日のあたりけり　燕子
ともし火に雨の牡丹の大きさよ　同
落つる日や秋の蟬鳴く檜木原　同
村と見えて雪の野末の煙りけり　繞石
思はずの村へ出でたり薄山　同
石壇や椎の實はらり〳〵落つ　同
雪の折戸あくれば雀さつと飛ぶ　四方太
月更けて雁鳴く海の廣さかな　愚哉
燒茨晝顔咲いて荒れにけり　愛櫻子
泥龜の氷の上を這ふて居る　秋竹
蒲團短し足袋はいて寢ねるべく　同
名月や杉の上なる塔の尖　同

其他の人吾人の知るばかりにても一々に論ずるに暇あらず。漏れたる人も多きに他日或は之れを紹介するの機あらん。

要するに昨年に於ける俳壇の諸子は著く進歩せり。併し一個人の進歩は何れの年にもあることにして昨年に限りたるに非ず。昨年に限りたる俳句の進歩は調子の上に新調の生まれ出でたると、趣向の上に印象明瞭なる者時間を含みたる者人事を詠じたる者多くなりし等なり。一昨年にかありけん、吾人の俳句に天然多く人事少きを難じたる人あり。吾人は當時俳句に人事の賦し難き所以を論じたる事ありしが、昨年に於ける人事句の發生は事實の上に於て吾人の論を打ち消したるな

り。只だ其の人事句は舊來の五七五調の形を假らずして他の新らしき形を以て現はれたる者なることを忘るべからず。

昨年の俳壇大略右の如し。今年の俳壇果して如何。吾人は只刮目して之を見んのみ。

附記

明治廿九年の俳句界(六)の中に「知識を交へたる美が果して最上の美なるか否か之を知らず」とありしを知識を交へたるの語は語弊あり改むべしと注意せし人あり。此說穩當なり。吾の意は印象明瞭といふ事の殆ど全く知識を用ゐざるに反して餘韻といふ事の多少知識を用うるを言ひし者にして、普通の人は知識を交へたる者を喜ぶ傾向ある故斯く述べたるなり。されど知識的といふ語を理窟的といふが如く智識の程度多き場合に用ゐ來りたればこゝに用うるは語弊なしとせず。

同(八)の終りに「餘韻を主張する人の說を見るも其佳とする處は凡そ餘韻五迄の間に在るが如し。吾人の佳とする區域は之に倍す。」とあるを疑ふ人あり。餘韻五迄とは餘韻十より餘韻五迄を取るの意なり。之れに倍すとは餘韻十より餘韻一迄を取るの意なり。(但し餘韻少きときは印象明瞭を要す。)餘韻家は印象如何に明瞭なりとも餘韻少ければ取らざるなり。

同(六)の終りに「時間は空間の變動に因りて始めて知覺せらるべき者にして時間を現さんとせば是非とも空間を現さゞるべからず」とあるを哲理に反けりと或る人の注意せしは尤もなり。時間は空間の變動に因りて始めて知覺する者ならず、知覺の字は誤にして「知覺せらるべき」とあるは「實にせらるべき」とでも書くべき處なりしなり。それにしても猶こゝには粗漏の罪免れ難し。そは主觀のみにて能く時間を現し得べき事を言ひ漏らしたるなり。

永き日のつもりて遠き昔かな　蕪村

の如き其一例なり。只斯の如き句は稀にありて常にあらず。其他の文學にても然り。常にあらざるが故に思ひ漏らしゝなり。常にあらざるも稀にある上は「是非とも空間を現さゞるべからず」と言へりしは誤なり。されば此處に於て吾は哲學上の不合理を來しゝのみならず、文學應用の上にも思ひ誤りしなり。

同(四)の終りに「美術の價値は比較的の者なれば自ら見たる畫の外に最上の美なる者を想像すべからず」とあるを非難する人あり。曰く美の標準とすべき靈體(即ち絶對に美なる者)比較を離れて單獨に存在する者なり故に美の價値は比較して後に始めて知るべきに非ず。と答へて曰く美の標準が先天的に絶對的に存在するか將た二物以上の比較よりして抽象し歸納し以て完全に近しと思へる標準を立てたるか、そは哲學上の大問題なれども美術に應用したる結果に關係なければこゝに論ぜざるべし。縱し難者の說の如くするも「自ら見たる畫の外に最上の美なる者を想像する能はず」といへる語には何等の關係も無かるべし。何となれば其標準なる者は絶對なるにもせよそは抽象的の者にして具象的の者に非るなり。即ち美術的の形體を成す者に非ずして美術に逢ふて始めて其美醜を判し得る者なり。故に美術品を見て不完全なりと判定するも、完全なる者は此の如き者なりとて之を形に現す事は能はざるなり。只能くし得べきは既に現はれたる美術品の幾分を增減修正していくらか完全に近かしめたる者にして最上の美とはいふべからざるなり。されどこは比較的に幾歩を進めたる者にして最上の美なる者を想像すべからずとは美なる者ありと想像し得ずといふに非ず、美なる者の形を豫想し得ずといふなり)

戯れに俳壇諸子に向つて二字評を下したるを左に掲げつ。こは其特色を擧げたるのみにて優劣を示す者に非れば其心して見られよ。

○鳴雪　高華　○牛伴　精微　○把栗　樸茂

○叟柳　清麗　○三鼠　形容　○戯道　婉愜
○李坪　溫潤　○漱石　活動　○極堂　工緻
○不迷　跌宕　○霽月　雄健　○飄亭　曠達
○愚哉　眞率　○梅屋　醇厚　○碧梧桐　洗鍊
○虚子　縱横　○洒竹　蒼勁　○紅緑　纖穠
○露月　警拔　○肋骨　奇崛　○四方太　豪放
○繞石　明快　○其村　輕新　○東雲　孤峭
○左衛門　冲澹　○墨水　流暢　○鼠骨　敏捷
○秋竹　俊爽　○蒼苔　實境　○露石　瀟洒
○靈子　老辣　○森々　疎野　○花叟　雋永
○燕子　縝密　○無事庵　委曲　○別天樓　秀整
○碧玲瓏　廣悍　○愛櫻子　含蓄　（明治卅年一月「日本」に掲載）

第二篇　明治三十年の俳句界

（上）

明治三十年の俳句界は明治二十九年の俳句界に比して幾多の進歩を爲したるを見る。進歩に二あり。一は初學の俳人が漸く上達するをいふ、一は既に上達したる俳人が古人の進まざりし區域に迄進むをいふ。前者は望を未來に屬せしむるに過ぎず。眞成の價値は後者にある事論を俟たず。而して之を代表する者を碧梧桐とす。碧梧桐は意匠の奇拔を以て勝りし者、昨年來却て平易なる（しかも陳腐ならざる）方に赴けり。句調は一昨年の末より喜んで長短句を爲し亂調に流れし者今は却て普通なる五七五調に返れり。五七五調に返りしは固より進歩に非ざるも、其意匠の全く古俳句と趣を異にしたる處とそれに伴ひたる句法の變化とは古人が未だ曾て知らざりし未開の地を開きたる者にして、其價値は容易に之を評定するを得ざ

れども、少くとも彼が一機軸を出だしたる功は俳句史上に特筆すべき者に屬す。』余は之を說明するためには直ちに實例に就きて解剖するの解得し易きを信ずるを以て此法に據りて數句を說明すべし。

夜に入りて蕃椒煮る臺處　碧梧桐

此句に些の理窟無き處、殆んど工夫的の痕迹を留めざる處（工夫を凝らしたる句なるべけれどそは痕迹を留めざるやうに工夫せし者にて、十分成功するを得たり）意匠は日常の瑣事ながら毫も陳腐ならざる處句法亦平易にして切字あるが如く無きが如く、しかも能く切るゝ處、劇烈に感情を鼓動する者ならずして、淡泊水の如き趣味を寓する處此數箇條は此句が極端に新體を現したる所以なり。若し從來の俳風に拘泥する人をして見せしめば沒趣味の句と爲し了らん。此等の人此句の趣味を說明せよといはゞ、余は答へていはん、虛心平氣此句を翫味せよ、全く自己の量見を拋却し身を此句中に置きて此句の中より新趣味を探り出だす可しと。

蓋し趣味は感ずべく、說くべからず。然れども稍烈しく感情を刺激すべきものはヒント的に之を說明し得べく、又聽く者も此不完全なる說明の中より妙處に悟入すること無しとせず。只此句の如き淡泊なる者に至りては不完全なる說明をすら爲すこと能はず强ひて言はんと欲するも一點の厭味無しと評する位より外に何等の說明をも與へんに由無きなり。

水汲の男來て居る朝寒み　碧梧桐

此句の眼目は「居る」の二字にあり。此二字無くんば平凡見るべきなし。

客を率て夜半に歸るや月の門　碧梧桐

複雜なる意匠、新奇なる意匠は句法をして佶屈ならしめ易し。此句の意匠且つ複雜に且つ新奇にして、句法平易、大道を行くが如し。是れ亦新體の特色の一なり。

隱々として秋の山鳴ることを知る　碧梧桐

滯陣や久しうなりて秋の雨　同

此頃や末枯の芝刈る遲し　碧梧桐
水に落ちて泳ぎかしこき螽かな　同
尙生きて生ぐさきものに秋の蠅　同
鹿に與ふ煎餅を買ふ旅心　同
蜻蛉や世話しい中へ臺所　同
古里の先生の軸や梅もどき　同

此等の句を見て余が謂ふ所の新體なる者を求めなば解する人は必ず解すべし。

此新體と從來の俳句とを比するは猶油畫の新派(紫派)と油畫の舊派とを比するが如し。一は簡單(畫題小なり)、一は複雜(畫題大なり)。一は平易、一は佶屈。一は淡泊、一は濃厚。一は輕新、一は沈著。一は些細なる者の極めて微なる感じを現すに適し、一は壯大なる者の最も深き趣味を寫すに宜し。いづれにも一長一短は免れ難し。兩者並立して相互の短を補ふは文學を大成し美術を大成する所以には非ざるか。

碧梧桐と最も善く似たるを虛子とす。別に句を擧げざるべし。

(下)

碧梧桐、虛子、紅綠、露月、把栗、四方太、秋竹、蒼苔、漱石、霽月、極堂、繞石等は俳人の錚々たる者なり。此外地方に在りて昨年中に歩を進めたる者を茶村、菰堂子、青嵐、綠、瀾水、森々、香墨、桂堂等とす。鳴雪俳壇を退き墨水亦多くは俗事に礙げらる。

俳諧界の雜誌は「ほとゝぎす」伊豫に起り「秋の聲」東京に倒る。

俳書は蕪村句集の外に「與謝蕪村」「新派俳家句集」出づ博文館より「俳諧文庫」を出だす。

一昨年の末より昨年にかけて俳句會續々として地方に起る、雨後の筍の如し。地方俳句會の最も古き者を松山の松風會とす。起源數年前に在り。京阪の滿月會は

一昨年の秋を以て始まる。是より後、仙臺の百文會、金澤の北聲會、松本の松聲會、松江の碧雲會、駿遠の芙蓉會、越中の越友會相續いで起る。其の他京都には猶幾多の團結あり各地方亦小團結を作る者多し。昨年の上半に在りては松風會、百文會、北聲會等威を一方に振ひし者漸次に衰へ、下半に在りては滿月會獨り其隆盛なるを見る。然れども一盛一衰は種々の原因に出づる者にして必ずしも其地方の俳句の退歩を示す證據とは爲し難し。

昨年余は同一の俳句を取りて各地の俳人に示し之に優劣を附せしむ。地方俳人の評する所十中八九迄は相同く東都俳人の評する所一々其結果を異にす。而して地方の俳人は各地に散在する者にして敢て氣脈を通ずるに非ず、東都の俳人は屢〻一堂の中に會して議論を上下し居る者なり。蓋し東京の俳人は研鑽、琢磨のために各自の見識を生じ、各其見る所に向つて一直線に進行するを以て一方に僻し且其方にのみ發達するの傾向あり。地方の人は一はプリミチーヴなると一は小學校の先生の如くコムモン、センス的に發達し居るとの二原因に因りて相同き者ならん。此評に於て衆人に推されたる句は意匠上極端の事物を現したるものにして衆人に斥けられたる句は句法上不具的にしまりたる者（譬へば或る包を綱にて強く縛りたるため包みに凸凹を生じたらんが如し）なり。東都俳人中最も衆評に近き者を鳴雪とし遠き者を碧梧桐とす。衆の推したる句は卽ち碧梧桐の斥けたる句なり。衆の斥けたる句は卽ち碧梧桐の推したる句なり。是れ地方俳人句法上の觀察精細ならずして、徒に極端の趣向に眩耀せられ碧梧桐は句法の緊弛を吟味すること詳密にして、其弊として句法しまりあれば無理なる趣向をも寛恕するがためなり。兎に角句法に心を留めざるは地方俳人の一失なるべし。若し夫れ昨年の地方俳人を以て一昨年の地方俳人に比せば其進歩の著き同日に論ずべからず。

「明治二十九年の俳句界」に於て余が新派と稱へし者卽ち碧梧桐虚子により唱道せられし俳句は其意匠の上に於て殆んど全國の俳壇の一半を占むるに至れり。只音

調(字數)の上に於ては寧ろ保守派に降りたるが如し。地方俳人時に長短句を爲す者あり。

彼の俗宗匠派なる者との關係に至りては之を論ずるの必要無し。彼等は作る人を異にし、作る物を異にし、作る目的を異にす。近日俳句の流行につれて各地新聞往々宗匠派の俳句を載す。俗氣滿紙、陳腐相倚る。しかも新聞記者先生玉石を區別する能はず、燕石を襲藏して珍となす。殊に笑ふべし。只新聞、俳句を載する者其數を增したるは昨年中の一現象なり。

(明治三十一年一月「日本」に掲載)

第三篇　明治三十一年の俳句界

明治卅一年の俳句界は明治卅年の俳句界に比して一段の進歩を爲したり。東京と地方とを問はず、先輩と後輩とを問はず、進歩は全國を通じて普遍なるが如し。若し俳句界に於ける地位を論ずれば、地方は概して東京に及ばず、後輩は概して先輩に及ばずといへども、一昨年と昨年との進歩の比例をいはゞ、東京の進歩は地方の進歩の速かなるに及ばず、先輩の進歩は後輩の進歩の速かなるに及ばざるを見る。他の言葉にていはゞ地方の地位は東京の地位に近づかんとし、後輩の技能は先輩の技能を凌がんとするの傾向を現したる者なり。東京のため先輩のためには奮發一番、扶搖に摶ち、九霄に遊び、彼兒輩をして巾幗婦人の贈を爲さしめざらん事を思ひ、地方のため後輩のためには勇往直進、利刀の竹節を破るが如く、

香車の角行を刺すが如く、清正の猛虎を衝くが如く、彼毫碌連をして一敗地に塗れしむるの勇氣あらん事を思ふ。今年の俳句界は果して如何の取組を爲し如何の勝敗を見んとするか。余輩亦緊褌して而して刮目せん。

昨年俳句界に於ける技術上の傾向は第四篇「俳句新派の傾向」に述ぶるが如し。此傾向たる固より昨年に始まりしにあらずといへども、昨年に至りて益其傾向の著き者ありしは、少くも一昨年と昨年とを比較せし人の善く知る所なるべし。此傾向は今年に於ても猶直進すべきか將た一轉して他に向ふべきか、そは一に柁手たるべき人の技能に屬するなり。柁手は誰ぞ。先輩か、後輩か、東京か、地方か。」

各地俳況は毎號載する所、詳細なるを以てこゝに贅せず。東京にては先輩鳴雪再び俳壇に出で後進を誘導す。太だ人意を強うす。其蕪村句集輪講に於ける解説の如き其力を藉る者もつとも多し。碧梧桐の老錬にして遒勁なる虚子の高朗にして活動せる、共に天下敵なき者、若し此矛を以て此楯を突く、吾人固より其勝敗する所を知らざるなり。露月の跌宕、四方太の勁直、一は熊の如く、一は猪の如し、猪一突、熊或は其牙頭に翻らん、熊一搏、猪或は其脚下に倒れん。好個兩雄、世人唾を呑んで覩る。

京都には先輩紫明、滿月會を統率して常に俳運の隆盛を致す。其他各地盛衰ありと雖も、概するに俳句會と俳人と共に增加の傾向を現せり。肥の漱石、越の紅緑、豫の極堂等皆地方の先輩として一騎當千の勇將なり。漱石の超脱にして時に奇警なる、紅緑の圓活にして虚字を利用する、極堂の敏捷にして語句緊密なる、此點に於て誰か能く彼等に敵せん。聞く紅緑近時多病なりと。自愛、棄つる莫れ。

昨年に在りて著き進歩を現したる者、東京に五城あり、越後に香墨あり、大阪に青々あり。青々の句は昨夏始めて之を見る、而して始めて見るの日既に其堂に上りたるを認めたり。其句豪宕にして高華、善く典故を用るて勃宰に墮ちず、多く漢語を插みて澁晦ならざるを得る者、以て其伎倆を見るに足る、但年月多からず、

經驗猶少し、嗜好偏局、未だ變化する能はず。專ら高遠に馳せて時に失墜を免れず、却て平淡の中に至味あるを知らざる者、其缺點なり。若し勉めて已まざらんか、造詣する所測るべからざる者あり。吾曩に狙醉を得て推奬措かず。一朝にして其消息を絶つ。或は幽明、處を異にせしかの疑あり。追慕の念愈〻甚しく、白雪杳として尋ぬべからず。今青々の句を見るに、時流の外に超越して獨り地歩を占むる處、五年前の俳句界に狙醉の句を見しと其感を同ふす。殊に漢語を用ゐる處相似たり、典故を用ゐる處相似たり、雄健にして斬新なる處相似たり。狙醉は實に吾人が蕪村を唱道せざる前に在りて蕪村調を爲したる者なり。而して彼は實に育者なり。余は彼を憶ふ毎に無限の暗黑の裡に低頭默坐したる彼の瘦容を認めずんばあらず。狙醉去り青々來る、之を東楡に失ふて之を西隅に得たり。香墨は漸を追ふて進む者基礎既に堅し。五城亦昨年始めて之を見る。練磨不撓、一日々々より進む。前途望多し。

豫の花叟、常の芳水、京の青嵐、越の竹の門、花笠等進歩の著き者なり。

試に各他俳人分附の表を作りて左に掲ぐ。

東京　鳴雪。碧梧洞。盧子。四方太。露月。秋竹。肋骨。五城。繞石。把栗。墨水。左衞門。麥人。鼠骨。樂天。露葉。格堂。白濱。太古。活潭牛。右衞門。漁村。月人。骨子。

横濱　牛伴。森々。胡堂。

京都　紫明。青嵐。菰堂子。瘦石。煙村。非無。

大阪　青々。別天樓。孤村。疑星。橡面坊。

遠江　雪鵬。

下總　井村。臺村。

常陸　牛里。芳水。靜子。

美濃　茶村。鴨脚子。

信濃　三川。奇峰。木外。八千溪。
上野　鏑川。萩郎。
陸前　瀾水。
加賀　紫影。洗耳。碧玲瓏。
越中　紅緣。竹の門。花笠。竹湍。廓外。
越後　香墨。無事庵。
美作　一五坊。
出雲　梧月。羽風。
讃岐　桂堂。
伊豫　極堂。霽月。曳柳。花曳。虛堂。萱村。燕子。
土佐　靈子。春風庵。
肥後　漱石。千江。紫川。

右誤脫あるべし。句を見ること多からざる者はこゝに加へず。（愚哉は旅中に在り故に記さず）

（明治三十二年一月「ほとゝぎす」に掲載）

第四篇　俳句新派の傾向

世界の文明が簡單より複雜に赴き粗大より精微に赴き散漫より緊密に赴くと共に、美術文學も亦同一の傾向を取りて進歩しつゝあり。美術文學が簡單より複雜に赴き粗大より精微に赴き散漫より緊密に赴くと共に俳句も亦同一の傾向を取りて進歩しつゝあり。一國の安寧より言はんか、複雜なる政治は必ずしも簡單なる政治に勝らず。個人の保全より言はんか、散漫なる法律は必ずしも緊密なる法律に勝らず。趣味の淺深高下より言はんか、粗大なる文學美術は必ずしも精微なる文學美術に勝らず。上に葛天氏あり下に葛天氏の民あらば無爲の政は天下長へに泰平なるべく、法律の不備、德川時代の如くにして判官大岡の如きを得ば賞罰勸懲、道德の標準と一致して獄に寃枉なきを得べし。漢魏六朝の詩、古事記萬葉の歌、高古蒼老、樸にして燥ならず、華にして浮ならず、後世の人却て及ぶべからざる者なり。元朝東山の畫、雄健雅清、純粹にして雜駁ならず、世外に超然として些の塵氣を留めざる者、誠に心を高うするに足る。殊に文學美術に至りては新、舊に若かず、今、古に及ばずと絶叫する者さへある豈多少の理なからんや。然りとはいへども進歩は多樣と變化との謂に外ならず。沈重なる文學は變じて輕快なる文學となり、莊嚴なる美術は變じて滑稽なる美術となる事ありと假定せよ。縱令、輕快は沈重に及ばず、滑稽は莊嚴に及ばずとするも、沈重の一種あるは沈重と輕快の二種あるに及ばず。莊嚴の一種あるは莊嚴と滑稽の二種あるに及ばず、輕快と滑稽との時代は沈重と莊嚴との時代に及ばずとするも、前者は後者をも合せて翫味するを得る點に於て後者に勝りたり。是れ時間的多樣なり。前例ある者は模するに難からず、一度發輝せられたる趣味は人變り星移るとも全く消滅する者に非ず、故に六朝の詩は六朝の詩體あり而して時に漢魏の遺音存す。唐の詩は唐の詩

體あり而して時に六朝の餘風を帶ぶ。清朝に至りては漢魏六朝唐宋元明の諸體兼ね備らざるなし。或は一人にして陶鑄溶冶して之を出だし。或は人々、古調、唐朝、宋朝以下各自の嗜好に應じて之に倣ふ。何れの國と何れの時とを問はず後世には必ず上世の分子を交へて能く其の多樣なるを致すは爭ふべからざる傾向なり。是れ空間的變化なり。時間的と空間的とに論なく能く變化し能く多樣なる者、孰れか進歩ならざらん。宋詩は唐詩に劣れり。されど宋詩を以て、支那詩界中の一彩色として見ば亦進歩に外ならず。浮世繪は狩野派に劣れり。されど浮世繪を以て日本畫界中の一種類として見ば此亦進歩に外ならず。人々の嗜好は、或は古種に偏し、或は新奇に偏し、或は雄壯に偏し、或は艶麗に偏し、或は天然に偏し、或は人事に偏すといへども、後世に至るに從ひ一人にして能く諸種の趣味を兼該する者少からず。少くとも人口增殖し教育普及するに從ひ、各人の嗜好は千狀萬態の變化を現し來るなるべく、之に應ずるに各種の文學美術亦千狀萬態ならざるべからず。各種の文學中に俳句なる短詩の存在するも此理にして、俳句が時代に從ひ變化するも亦此理なり。

俳句は詩形の簡單にして作者の多かりし爲め、短日月の間に最も多くの變化を爲すことを得たり。其趣味の多種なること句法の變化せること、彼德川時代の和歌、小說、戲曲の遠く及はざるところなり。元祿の俳句が天明に至りて著き發達を爲したるは簡より雜に、麁より細に、漫より密に、消極より積極に赴きたること固より進歩の大勢に從ひたる者なり。享保寶曆の俗調も天保以後の俗調も其時代の價値より言はゞ退歩墜落に外ならずといへども、古今の俳句界を總べて之を見ば、其特色ある處亦一種の進歩として之を目するを得べし。而して明治に至りて興れる所謂俳句新派なる者は啻に一特色あるが爲に之を進歩といふべきのみにあらず、其特色の價値より之を元祿天明に比して遜色無きを信ず。是れ特に此題目を提げたる所以なり。

後世の文學美術が次第に多樣に赴くは上に述べたるが如し。明治の俳句に元祿調あり、支那調あり、天明調あり、文化文政調あり、天保嘉永調ある等、此の如き多樣も亦一進歩と見做すべきものなれども、こゝに論ぜんとするは此種の進歩に非ずして、元祿にも天明にも天保にも非る一種の特色なり。特色といふ。然れども月と鼈との如く殊なるは稀にして、多くは程度の相違に屬す。元祿の俳句を貞派談林に比すれば殆ど別種類の感あり。寧ろ俳句は元祿に始まれりといふて可なるべし。元祿以後の變化は唯程度の相違のみ。天明の特色といふも、廣くいはゞ元祿に比して程度の相違のみ。明治の特色といふも、廣くいはゞ天明に比して更に一歩を進めたるに過ぎず。天明に於て精微なりしもの其程度を進めて明治の精微となる。其他複雜、緊密亦然り。故に之を示さんとすれば俳句を擧げて比較せざるべからず。其二三を左に記して以て一斑を見んとす。

因に云、明治の小說界が德川時代の小說界に比して進歩を爲したる比例は、明治の俳句が德川時代の俳句に比して進歩を爲したる比よりも更に大なり。其度は小說は德川時代に在りて極て幼稚なるに拘らず、俳句は元祿天明寬政文化に於て既に異數の進歩を爲したるに因る。西鶴其磧馬琴春水皆一代の文豪なり。しかも其著作の價値は皆時代的にして實力的に非ず。獨り蕪村等の俳句に至りては其時代の佳作たるのみならず、今日より見て其完全なるもの多きに驚く。蓋し一方に於て俳句の進歩斯の如く速なるは他方に於て俳句の終極の近づきつゝあるに非るを得んや。

例句を擧ぐるに盧子、碧梧桐の句を主となすは二氏の句が新派の傾向を現すこと最多ければなり。新派の傾向なるものは必ずしも一人二人の指導に因る者に非るべしといへども、二人の力與つて多きに居るは疑を容れず。

明治の俳句が複雜となりたる例として先づ初に清水の濁るといふ事を詠める古句を擧げて比較すべし。

(元祿)一桶のあと濁されし清水かな　割鮀
(天明)二人して結べば濁る清水かな　蕪村
(寛政)濁りても中からすめる清水かな　默我
(文化)濁しては澄むを見てゐる清水かな　五明
(文化)筆提てつい濁したる清水かな　尺艾
(天保)涌き口を尋ねて濁す清水かな　梅室

俳句の上に年號を記したるは略〻其時代を示すのみにして精細なる者に非ず。以下同じ。

清水の濁るといふ趣向は珍らしき事にもあらねば多くの人が詠み出でたるならん、元祿の句は一桶のあと、天明は二人、文化は筆提げで、天保は涌き口と變化し、中二句は同意匠にて、各濁りの澄む處をいへり。多少の新意無きにあらねどいづれも清水を離るゝ能はざりしために大同小異の感あるのみ。明治の俳句は、曰く

強力の清水濁して去りにけり　碧梧桐

「去りにけり」の五字にて清水を離れ且つ自己を離れたり。即ち清水を掬ふといふ動作の外に更に去るといふ動作を加へ、清水と人とを配合したる光景の次に人無き清水の光景をも時間的に聯結し、以て之を複雜にし、以て陳套に陷らざるを得たり。是れ明治俳句進歩の一なり。(「去りにけり」の五字を添へたるがために趣味の上に生じたる變動は後に他の例に就きていふべし。)

又一例として雉を打つといふ句を擧げんに

日暮るゝに雉打つ春の山邊かな　蕪村
雉打つて歸る家路の日は高し　同
春の夜や晝雉打ちし氣の弱り　太祇
人の親の燒野の雉子打ちにけり　曉臺

皆安永天明寛政頃の句なり。明和以前には此趣向無し。そは時世の變遷にも因るべけれど、元祿にては雉を打ち殺すなどいふ事を殺風景なりとし俳句の趣向に入らぬ者と思ひしなるべし。文化以後も亦恐らくは此趣向無し。俗俳家必ずや無趣味と思ひおとしめしならん。蕪村太祇等が猶り此間の趣味を解したるは二人が非凡なる事を證する者なり。(曉臺の句は殺風景と見ての趣向なれば共に論ずべからず)蕪村の第二句の「雉打つて歸る」と歸路のことを言ひしは第一句に比して稍複雜なる方に赴けり。更に一歩を進めて

將軍の雉打つて歸る玄關かな　秋竹

とすればいよ〳〵複雜となる。若し「雉提げて歸る」としなば其光景は全く瞬間の事となり且つ將軍の印象漠然として捕促すべからず、複雜の程度も太祇の句に一歩を進めたる位に止まるべし。只「打つて」の語あるが爲に、將軍の輕裝して獵銃を肩にし獵犬を伴ひたる樣をも眼に浮ばしむべく、將た玄關に書生下婢或は妻君迄も出迎へたる樣を想像すべし。蕪村の第二の句も獵者の服裝を連想せしめざるにあらねど獵者の身分を言はざりしために連感極めて薄弱なり。雉を打つといふ事の趣味は今日の俳人之を解せざる者無し。こは一般の進歩なり。(此等の句の比較は複雜の程度をいふ者にして、句の價値をいふ者に非ず。其進歩といふも複雜の程度の增加したる意にして、明治の句は蕪村の句に優るとの意に非ず、他の比較も皆同じ、誤解無きを望む。)

貧交

(元祿)交りは紙衣の切を譲りけり　丈艸

新宅祝

(明治)交りは安火を贈り祝ひけり　碧梧桐

「祝ひけり」の五字あるがために他の家に(新宅移轉と分らずとも)何事か取り込みたる事あるを想像せしめ、丈艸のに比して頗る複雜に聞ゆ。前の清水の句法と相

似たり。

奈良は鹿の鳴かざるを見て戻りけり　極堂

奈良に來て鹿の鳴き聲を聞かず、といふばかりは古人も或は言はん。「見て戻りけり」と迄はいかでかいひおほせん。

起き出づる夜半の勞れや蠶飼の灯　虛子

蠶飼ふ茶店の媼の眼鏡かな　秋竹

蠶飼の爲に夜半に起きる事は古人にも考へ得べし。されど「勞れ」といひたるは一歩を進めたり。「灯」と結びたるに至りては夢にも思ひ及ぶべからず。茶店の老婆の蠶飼は今日の實際として珍らしからず。只「眼鏡」の一語ありて一歩を進めたり。

むにや〳〵と眠り入るなり顏に蠅　紅綠

時間的の複雜なる經過を成るべく印象明瞭に現さんとしたる者、古人はこゝに想ひ到らざるべし。

盆梅に燭して轉の句は成りぬ　秋竹

古人ならば盆梅に燭すといふだけの趣向にて十七字を埋むべし。句を成すといふ趣向を加へたる既に一歩を進めたり。更に進めて「轉の句」と限りたるは明治ならでは言はぬ事なり。而して盆梅に燭する事と轉の句の成る事との間に、想像に餘れる幾多の事實の伏在すること、此句の如きは明治の俳句界にも多く其比を見ず。

(此種の句が完全なりや否やには疑ひあり。文中引く所の總ての句は比較に便ある者又は傾向の著き者にして、必ずしも完全なる句には非るなり)

帚木は皆伐られけり芙蓉咲く　碧梧桐

枯葛を引き切りたりし葬かな　虛子

右の二句は時間的に二個の光景を聯想して、しかも二個の中心點を有する者なり、一個の中心點は上部に在り、他の一個の中心點は下部に在り。前句は先づ帚木の多く生えたる處を想像せしめ、次に帚木の伐られて後芙蓉のあからさまに咲きた

る處を想像せしむ。後句は先づ枯葛を引き切る樣を想像せしめ、次に枯葛の無くなりし後の葎を想像せしむ。此句に二個の中心あるは其語句の用法に在り。若し改めて「帚木は皆伐られたる芙蓉かな」「枯葛をひいてしまひし葎かな」とすれば中心は一個となるべし。之を一個とせずして二個となすは明治の伎倆なり。總ての美術文學に二個の中心あるを許さゞるは從來一般に信じ居りし原則なれども俳句には二個中心ある者を出だせり。近時西洋にも此種の小說ありと聞く。余は、二個三個の中心點ある者も亦結合の如何によりて趣味ある詩又は畫となるべきを信ず。

朧夜の川幅廣し笛を聞く　四方太

視官と聽官に中心點一個宛あり。笛の聲と改むれば中心は一個となる。余も亦近時一種の句法を爲す。皆二個の中心點を有す。しかも一個の中心點は上十四字に在りて他の一個は全句に在り。

山寺や松ばかりなる庭の月
權現や櫻もまじる杉の雨
紅葉見や女載せたる駕の雨
家主の植ゑてくれたる松の秋
野分して片枝折れし松の月
移徙や昨日植ゑたる松の雪

此句法は初め十四字にて描きたる一枚の繪に(全句讀み終りて後)更にある物を添へて少しく異る他の繪を描かしむる者にて、或は思想を混雜せしむとの批難あり。余も完全なりと思へるに非ず。姑く記して參考に資するのみ。

畑に鷄多く棗の木の茅かな　碧梧桐
比枝寒き峯のつゞきや東山　同

此句は連續せる空間を一段に現したる者にして恰も二枚の繪き繪の如し。二枚の

續き繪は之を合して一個の中心を有すると同時に、之を分てば二個の中心點を有す。

砂道や片側松の秋の海肋骨

此句、余の解釋によれば、松は右側に在り、海は左側に在り、砂道は其中間に在り、作者は砂道の上に在り、而して中心は唯一個にして、作者は卽ち其中心點なり。之を繪に喩ふればパノラマの如し。若し十七字の中にパノラマ的光景を描出するを得ば一種の奇觀として見るに足らん。但此句には批難あり。余の解釋適當なりや否や。

景色を現すに之を繪畫的觀相に止めず、更に他の知力を借りて之に地圖的說明を附すること、昔も幾何かありたらんも、今日に至りて著く其度を高めたり。

椎の實や小庭にせまる山の裾　牛伴

海近き橋に眞晝の寒さかな　碧梧桐

只見たる許りには「山の裾」「海近き」と知るを得ず。僅かに見ゆる一部の高みを見て之を山と斷定し、一部の水を見て之を海と斷定するは、記憶推定等複雜なる知識の作用に因るなり。或る程度迄は俳句に此知識的作用を交ふるを許す。若し度を過ぐれば全く沒趣味となる。

俳句に人事を詠ずるは天明に至りて其度を高めたり。人事の稍複雜なる者を取りて之を十七字に塡めんとすれば勢ひ歷史的抽象的となりて小說的具象的たる能はず。其弊、前に言へる空間の地圖的說明と異ならず。然るに蕪村は特種の伎倆を以て「御手討の夫婦なりしを衣がへ」「打ちはたす梵論つれだちて夏野かな」等の句を爲す。抽象的說明を加へて却て具象的連想を多からしむ。此傾向は今日に於ては殆ど普通なる迄に度を高めたり。

繪蹈して生き殘りたる女かな　虛子

は蕪村の衣がへの句に似て過去を雜へたる者

罵るや戎を縛す　雪礫　碧梧桐

は複雑なる人事なれども比較的に具象の分子多し。

移り住んで炭の小買や新世帯　秋竹

は極めて抽象的なれど

春風や舟伊豫に寄りて道後の湯　極堂

に至りて更に多く抽象的となる。蓋し多くの時間が全句に満遍に分配せられたるに因る。斯る多くの抽象的分子を加へて多少の趣味を備ふる者明治の特色ならずとせんや。

綜合的に複雑なる者は又分析的に細微なるを得べし。天明に至りて細微に一歩を進め、明治に至りて更に一歩を進む。細微とは挾き空間、短き時間に於ける現象を精密に現すの謂にして、其特長は印象明瞭の一點に在り。譬へば成るべく精密に一枝の牡丹を描きたらんが如し、一枝の牡丹、別に新趣向あるにあらず、他に配合物あるにあらずといへども其繪にして能く寫生し得たらんか、一見して眞物の眼前に在るが如き感じに一種の快感あるべし。是れ俳句に所謂印象明瞭なり。

平凡の意匠、尋常の句法、而して一讀、其景眼に在る者、

水に落ちて泳ぎかしこき蟲かな　碧梧桐

筋違に畫寐の足を伸ばしけり　同

折戸あくれば連翹たわむ垣の内　四方太

枝豆の殼ばかりなり盆の上　肋骨

脊の子の脱げかゝりたる頭巾かな　失名

の如し。天明には

三椀の雑煮かふるや長者ぶり　蕪村

といふ。雑煮の數をよむが如きは元祿の知らざる趣向なり。而して明治にては

やゝ小き雑煮の餅の三つかな　虚子

といふ。「三つ」と數ふるのみならず、「小き」と形容し、更に進んで「やゝ」と形容す。印象明瞭の點に於ても一歩を進めたり。

余は更に進んで明治俳句に現れたる新趣味を研究せんとす。こは極めて必要なる事に屬す。此新趣味は、油畫に在りては所謂紫派となり、小說に在りてはスケッチ的短篇となり以て今日に現れたり。繪畫小說俳句界の潮流は孰れを模するとなくて自ら同一揆に向ひつゝあり。是れ大勢なるべし。此新趣味たるや、濃厚なる趣味に非ず、高遠なる趣味に非ず、寧ろ淡泊平易なる趣味にして、從て中心は一點に集中せず稍放散せる傾向あり。例を小說に取りて言はんか。昔は主人公の極度に成功し、又は極度に失敗したる事件來歷を叙したりし者、今は或る程度に成功し、或る程度に失敗したる事を說くに止まる。昔は或る情人を終に手に入るゝか、然らざれば之を殺すか、然らざれば自ら殺すか、の極點迄つきつめて始て快と稱せし者、今は或る情人を手に入るゝこと能はされども、さりとて彼を殺すにも非ず、自ら殺すにも非ず、只鬱々として不愉快なる日を送ると結ぶ。其殺しも殺されもせぬ處に一種の愉快を感ずるなり。更に淡泊平易なるは女主人公が男主人公を愛するでも無く愛せぬでも無く、男主人公が女主人公を得たでもなく失ふたでも無く、曖昧未了の間に一篇を結ぶ事あり。しかも其曖昧未了の裡に存する微妙の感は、彼濃厚なる者、高遠なる者と全く種類を異にするを以て、必ずしも此、彼に劣るに非ず。(印象明瞭も此新趣味に附隨する者なれど前に陳べたれば再び言はず)

俳句に就きて言はんか

(元祿)水かけて見れどいよ〳〵氷かな　林鴻

といはゞ中心は氷にして、水かけて氷を現したる處に「落ち」はあるべし。

水汲んで氷の上に注ぎけり　虛子

といはゞ中心も「落ち」も無き者となり、前の句とは全く趣味を別にするを見ん。

若し此趣向を昔の人にいはしめんか、水を注ぐといふ中途の所爲に滿足せずして、必ず其目的の極度迄つきつめ「水かけて終に解けたる氷かな」などの意味に改むべし。斯くせば中心も「落ち」もたしかに出來るなり。されど中心と「落ち」との明瞭なる者のみ趣味あるに非ずして、只氷の上に水を注ぐといふ(「落ち」の見えぬ、目的の判然せざる)事にも一種の趣味を感ずるを得。此感じは人が氷の上に水を注ぎゐるを見たる時の感じと同一の者なれば、縱令作者自身の所業なるにもせよ、其目的が何に在るか、其結果が如何になるかを問ふを用ゐざるなり。高遠なる趣味は古き代(例へば元祿)に發達すべく、濃厚なる趣味は稍進みたる代(例へば天明)に發達すべく、而して淡泊平易の裏に寄する微妙の趣味は明治に至つて始て其發達を始めたり。高遠と濃厚とは共に刺激の强き者なるを以て先づ發達したりといへども、刺激の强き者は强きに過ぎて却て不愉快を感ずることあり。古の人の遲鈍なる感情に適度なりし刺激は、後の人の鋭敏なる感情には過度なる刺激となるべく、將た古の人の遲鈍なるが爲め感じ得ざりし低度の刺激は、後の人の鋭敏なるが爲め之を感じ得るに至るべし。

牡丹ある寺行き過ぎし恨かな　蕪村

宿借さぬ火影や雪の家つゞき　同

といへば行き過ぎし恨と宿借さぬ時の光景とを述べたる者なれども

宿借さぬ蠶の村や行過ぎし　虛子

といへば行き過ぎし恨をいふにもあらず、宿借さぬ時の光景を述ぶるにもあらず、蠶飼に宿ことわられし前の村は既に行き過ぎて宿借すべき後の村は未だ來らず、過去を顧ず未來を望まず、中途に在りて歩む時、何となく微妙の感興る。芭蕉其角は勿論、蕪村太祇もこゝに感得する能はざりしなり。

離別

(天明)戀々として柳遠のく舟路かな　几董

離　愁　　露　月

(明治)依々として柳の枝を放たざる

一は「遠のく船路かな」と言ひ切り、一は「放たざる」と未了に附す。

麥の風鄙の車に乘りにけり　碧梧桐

夜に入りて蕎椒煮る臺所　同

皆中途未了の處に在り。

以上述ぶる所、略意匠上の大體を盡せりと信ず。

此外

菫程なちひさき人に生れたし　漱石

人に死し鶴に生れて冴え返る　同

泥の精星と契りて田螺を生む　蒼苔

の如き架空的理想を現したる者あり、又

魯に大に諸侯を會す瓜茄子　露　月

蛇穴を出て孔子容れられず　同

の如く漢土の故事と漢語とを利用する一種の句抔あれども、そは一小部分の現象にして一般の傾向とはいふべからざるに似たり。

語句の上の特色も無きにあらねど多く意匠と關聯する者なれば繰り返すの要なし。只一二の例を示さんに

爭ひは白菊分つ黄菊かな　碧梧桐

の如きは最緊密なる句法にして「分つ」の使ひこなしは古來未だ有らざる所なり。

足早き提灯を追ふ寒さかな　虚子

の「足早き提灯」といふ續け樣は昔の人のせぬ事なるべし。此句の趣向既に昔の人の考へぬ所なれど假に此趣向ありとして、句を作らしめんに、「いそぎ行く提灯」と置くか、或は少しく意を轉じて「足早に提灯を追ふ」と改むべし。されどこゝは

「足早き」に非ざれば景色に活動を生ぜず。

句調の長短變化は天明に至りて度を高め更に明治に入りて甚だし。二三年前に流行したる亂調は漸く跡を斂めたりといへども初六字の中に五字の名詞を用ゐる事などは普通となりて怪まざるに至れり。

單獨なる材料も、汽車、電信、自轉車、蒸汽船などの如く時世的變化に作ふ者の外、猶古人の多く使用せぬ者を使用せり。季の題にては爐塞、蠶、蛇入穴、蛇出穴、雀爲蛤、蓮實飛、寒食、栗の花、汗、鹿笛、葱、風呂吹、足袋、蒲團の類、季以外にては戰爭、喧嘩、贈遣、無常、日午、尼、卜筮、片側町、穢多村、厨、厠、地震、火事、妾宅、吳、越、蜀、餘所心、恨の類枚擧に遑あらず。古人が俗として斥けたる者も之を俗ならしめずして句中の材料と爲し、古人が狹き題として遠けたる者も能く之を分析し綜合して立處に數十句を爲すは明治の伎倆なり。之を要するに明治の俳句は大體に於て天明に一歩を進め、猶多少の新趣味を加へて、大勢のまに〳〵變化し進歩しつゝあり。既往數年の間に現はれたる此傾向は少くも今後數年の間、其方位を變へずして、其程度を高むべし、然りといへども俳句の形式は十七八字を限りとして定められたる者更に之を擴張すべきにあらず。限りある文字。僅に十七八字。如何程之を複雜にせんとするも、如何程之を して印象明瞭ならしめんとするも、終に容易に其極度に達せん。余は思ふ今日の進歩は殆ど極端の進歩にして、最早此上の程度に迄複雜ならしめ明瞭ならしむる事能はざるべきを。若し今後の進歩として期すべき者ありとすれば、そは或る特別の事物に於ける觀念の未だ進歩せざりし者が滿遍に進歩して極度に達するの外あらざるなり。（明治三十二年一月「ほと〜ぎす」に掲載）

第五篇　明治三十二年の俳句界

明治卅二年の俳句界は明治卅一年の俳句界よりも進歩せり。俗世界に對する俳句界の位置に於いて、俳人俳社俳誌の增加に於いて、各進歩する所ありたりといへども、吾人が特に喜ぶ所は作句の伎倆の進歩せし一事に在り。作句の伎倆の進歩は明治卅一年の俳句と明治卅二年の俳句を比して知るべきも、我が偶然に爾く感じたるは「日本」の投稿を檢閲する際之を選拔する標準の卅二年は卅一年よりも高かりし事を知り得たる時に在り。そは卅一年の投句にして同年の紙上に載せ得ざりし者を附點のまゝ卅二年に廻し置きたるが、卅二年に至り前年の投稿を閲するに前年附點し置きたる句にして新に削除すべきもの十の五六乃至七八に及ぶを見る。しかも此の如く標準を高くして選びたる卅二年の俳句は卅一年の俳句に比して其數著く增加したるを見れば、我が選拔標準の徒に高くなりたるにはあらで、投句者の作句上の伎倆進歩して、佳句の數の增加したる事は疑を容れず。「日本」の投書に關する一事實は俳句界全體の現象に非ずといへども、「日本」の投書家が一般の俳句界と互に背馳する傾向を有せざる上は、此を以て彼を推すも亦强ち誤れりとはいふべからず。況んや事實はホトトギスの募集俳句欄に東京地方俳句欄に於いて歴々たる證徵を示すをや。

卅二年中「日本」への投稿は、之を前年に比するに、投句者の數に於いて減じ投句の數に於いて增したり。ひらたくいへば、前には五句十句位の惡句を記して試に投じ來りし素人連彌次馬連は跡を絶ちて、熱心なる摯實なる投句家は毎季一人一二百句より多きは千句に及ぶ程の句を投ずるに至りしなり。卅二年十一月卽ち秋冬の交に於いて「日本」へ投じ來りし句は日々數通、一日の句數二三百句乃至千句に及び、一日分の投稿を閲するに數夜を費すに至る。しかも「日本」に載する所、

日々十七八句に過ぎざるを以て投稿は筐中に堆積して供給は常に需要に數倍せり。「日本」ありて以來俳句の盛未だ今日の如きはあらざりき。

ホトトギスへの投句は稍「日本」と異なり。投句者愈多くして新作者愈多く新作者愈多くして佳句愈多し。蓋し「日本」の俳句は俳句界のある一部と關係し、ホトトギスの俳句は俳句界の殆ど全部と關係するがために此差違を生じたり。而して投句の數、佳句の數共に未曾有の增加を來したる事實は、ホトトギスに於けるも「日本」に於けるも同一なるを見れば、卅二年の俳句界は全部より見るも一部より見るも、明治再興以來第一の盛時といはざるべからず。

卅二年中俳人の增加と共に著く增加したるは各地の俳社なり。其數約一百半、殊に朝鮮仁川に仁川新聲會あり、露國ウラジヲストックに笠蓑會あるが如き、海外に寄留する我同胞中に同好の人を得たるは最も吾人が喜ぶ所なり。

俳社の增加の急なる、吾人をして幾何か驚かしめたる者ありといへども、そは卅一年の末に於いて卅二年の初に於いて既に其趨向を豫想せしめたりき。只俳諧的文學雜誌の勃興に至りては全く豫想外の事に屬し、且つ其機運の熟したるも僅に卅二年の歳末に在るを以て、未だ夢寐の感を免れずといへども、其計畫の各地に起りたるは事實なり。卅二年夏「芙蓉」靜岡に起り尋いで「車百合」大阪に起る。(加賀大聖寺に「むし籠」といふ小冊子あれども起原を知らず)皆俳諧的雜誌なり。此二雜誌の獨立して起りしだに吾人は一驚を喫したるに、今又京都に「種ふくべ」起らんとし、金澤に「吹雪」起らんとす、伊豆に「星影」起らんとし、仙臺に「うもれ木」起らんとす。果して能く起る乎、果して能く起らざる乎、起りて而して後に榮ゆる乎。起りて而して後に斃るゝ乎。批評眼は過去を見て未來を見ず。吾人は今各他雜誌勃興の報を得て俳運の隆盛を卜するに止めんとす。他日「明治卅三年の俳句界」を記するの時あらば此幾多の雜誌が吾人に多くの好材料を與ふるを信ずるなり。

風起る、之を盛といふ。風止む、之を衰といふ。日、中す、之を盛といふ。日、沒す、之を衰といふ。昨は四椀の飯を喰ふ、之を盛といふ。今は三椀の飯を喰ふ、之を衰といふ。盛衰は比較なり。比較は差別界の常態なり。自ら盛に居て衰を見る、衰、厭ふべし。自ら衰に居て盛を見る、盛、羨むべし。然れども平等界より之を見んか、甲盛に乙衰へ、丙盛に丁衰ふ、何の盛衰かあらん。大阪滿月會衰へて大阪三日月會盛に、伊豫松風會衰へて出雲碧雲會盛に、信濃松聲會衰へて加賀磬聲會盛に、陸前百文會衰へて羽後北斗吟社盛なりとせば吾人の平等なる批評眼は俳句界の上に何等の變動をも見ざるなり。父老いて飯一椀を減じ、子長じて飯一椀を增す、父老いて二椀を減じ、子長じて二椀を增す、父死して、子、子を生む。一家の健康に於いて增減する所あらず。然れども衰へたる父を知る者は悲み、盛なる子を知る者は喜ぶ。俳句界全體に於いて慶弔する所なしとするも俳社各個に就いて見れば慶すべき者あり弔すべき者あり。俳社各個に於いて慶弔する所なしとするも俳人各個に就いて見れば慶すべき者あり弔すべき者あり。

卅一年に盛なりし俳社は、多く卅二年に衰へしと同じく、卅一年に盛なりし俳人は、多く卅二年に於いて衰へたり。而して新に卅二年中に頭角を露はしたる者は東京に於いて潮音、格堂、三子、孤雁、竹子、道三、紫人、抱琴、牛歩等の數子、大阪に於いて鬼史、月兎、井蛙等の數子、因幡に於いて寒樓、紫溟郎等の數子、其他枚擧に勝へず。只此等の人概ね年少にして氣を負ふ。故に多く作る事を貪りて未だ撰擇取捨の識を具へず。其稿を見るに玉石混淆瑕瑾極めて多し。之を練修期と見ば可なり。成功は猶之を幾年の後に期せざるべからず。但比較的に佳句多きは潮音、寒樓等ならんか。

卅二年の俳句界の批評を終るに當り吾人は左の語を繰り返して自ら反省し併せて又諸君各個に反省を乞はんとす。曰く明治卅二年の俳句界は爾く進歩せり、而して吾一個の俳句は果して衰へざりしか。明治卅二年の俳句界には佳句多し。而し

て吾一個の俳句稿中には果して惡句多からざりしか。

附記

俳社一覽表抄

山城　京都滿月會　詩痩會
攝津　大阪滿月會　三日月會　有聲會
駿河　芙蓉會
武藏（東京ヲ除ク）連友會
常陸　風月會
信濃　松聲會　二葉會
上野　いなのめ會
岩代　隈水吟社
陸前　百文會
羽後　北斗吟社
加賀　北聲會　碧聲會
越中　越友會
因幡　卯の花會
出雲　碧雲會
伊豫　吟風會　無聲會
土佐　十七字會
肥後　紫明吟社
朝鮮　仁川新聲會
浦鹽斯德　笠蓑會

俳人一覽表抄

東京　鳴雪　碧梧桐　虚子　四方太　青々　肋骨
把栗　牛伴　繞石　五城　麥人　潮音
格堂　三子　孤雁　竹子　道三　寅彦
紫人　抱琴　牛歩　燕洋　鬼史　一五坊
丁堂　歎水
山城　四明　露石
攝津　橡面坊　月兎　井蛙　芳水　秋窓　巴子
駿河　雪鵬
武藏（東京ヲ除ク）三允　森堂　爲王

上總　子骨
下總　井村
信濃　三川　岐水　木外
上野　萩郎
陸前　瀾水
陸奥　紅綠
羽後　露月　悟空
越中　竹の門　花笠　竹湍
越後　香墨　無事庵
丹後　獅子
因幡　寒樓　紫溟郎
出雲　梧月　八量櫻

淡路　青嵐
伊豫　花叟
土佐　波靜　鐵蒺藜

（明治三十三年一月「ほとゝぎす」に掲載）

四年間終

四年間附錄

一　内藤鳴雪

内藤鳴雪は新派俳人中の老將なり。鳴雪の俳句初め猿蓑より入り殊に凡兆を尙ぶ。蓋し少しにても主觀に關したる句は之を斥け純客觀の句を愛し之を猿蓑集中に求めたりしに其結果として純客觀なる俳句の多數は凡兆の作なることを發見せり。

例へば

花散るや伽藍の櫨落し行く　凡兆
市中はものゝ匂ひや夏の月　同
初汐や鳴門の浪の飛脚船　同

ながく と川一筋や雪の原　凡兆

等の類なり。是れ其凡兆を崇むる所以にして又古來此の如く凡兆を研究したる人あらざるべし。俳句は其頃より著く進歩ししかも神に入りたる者少からず。

がらく と日は吹き暮れつ冬木立　鳴雪

玉川の一筋光る枯野かな　同

の如き其一例にして是れ明治二十五年暮の頃なりけん。然れども鳴雪は此の如く幽寂の境をのみ好むに非ずまた清婉なる者典麗なる者をも好めり。其例

梅散つて鶴の子寒き二月かな　鳴雪

夕月や納屋も廐も梅の影　同

殊に宮中めきたること大宮人めきたること上薦めきたること（概言すれば源語めきたること）を最も好む。從つて雅言を用ふることを好んで全く俗言を排す。其蕪村を好むも亦蕪村が俳句の材料として内裏、烏帽子、命婦、白拍子、狩衣等を用ゐたると又其雅言を用ゐたる處とに在るなり。例

紅梅や左府の大臣の牛車　鳴雪

春雨や葎の宿の白拍子　同

短夜の水干かけし几帳かな　同

催馬樂の節おもしろき扇かな　同

わいへんはとばり持ちたり星こよひ　同

又戀の句を好む。戀の句とはいへど其實、表に現れたる戀よりも、寧ろ戀すべき人の有樣を何となくおぼめかしたるが善きなり。

扇折其朧夜の聞かまほし　鳴雪

春の山入りにし人の跡こひし　同

小女郎に袖引かれたる紙衣かな　同

鞠かゞる妹が唐絲春近し　同

又滑稽の句を好む。蕪村集中の狐の句（殊に公達に狐化けたりの類）を好むも此わけなり。されども更に甚だしき滑稽をも好みて稍之に僻するかの嫌あり。

景清の蚤取りかぬる鎧かな　鳴雪

の如き其佳なる者ならん。既に戀を好み滑稽を好み純客觀を好むといふ。則ち之に偏するを免れず。俳人をして純客觀の凡兆調を學ばしめし者は鳴雪の功少からずといへども其弊は時に平凡無味に陷るに在り。其好古癖の如き殊に甚だしく第一に王朝時代を好み次に鎌倉足利時代を好み次に德川時代を好む。此の如く古を好むは則ち今を嫌ふ所以にして、明治の事物其眼中に映じ來れば毫も其中の美を探らず只一概に之を厭忌するの傾向あり。要するに上品なる句優美なる句清麗なる句雅淡なる句は其長所にして活動したる句複雜なる句印象明瞭なる句は其短所なるが如し。鳴雪年知命を越えて勇氣少しも衰へず。或は自ら七部集を點して俳友と共に其可否を論じ、或は運座に少年と共に馳驅して顧眄用うべきを示すが如き、血氣の青年を愧死せしむるに足る。猶其句數首を擧げて以て其變化を示す。

蚊柱や馬の沓解く背戸の月　鳴雪
人戀し夕山櫻黑本尊　同
若鮎のそれ程水は早からず　同
珍らしき沙漠の旅の若葉かな　同
美濃の蚊の近江へ逃げる蚊遣かな　同
隼のものくふ音や小夜嵐　同
野徑十歩われに鳴立つ夕かな　同
白梅は兄紅梅は姉にこそ　同
子雲雀の比枝山颪立ち兼ぬる　同
桔梗痩せ花老いて妹が肌寒し　同
初冬の竹緣なり詩仙堂　同

小謠や櫻月夜の二條衆　鳴雪
夏山の大木倒す谺かな　同
明け易き夜を杯盤狼籍たり　同

吾れ曾て論詩絶句に倣ふて戲れに論俳句なる者を作る。中に鳴雪を詠ずるものあり。附記して一粲を博す。

初雪松梢天主閣。餘寒古道一枝梅。依然格調學元祿。却自天明着想來。

起承二句は鳴雪の俳句

初雪や松の梢の天主閣　鳴雪
古道に梅一枝の餘寒かな　同

を譯したる(寧ろ其まゝに記したる)者なり。鳴雪自ら元祿を尙ぶと稱す。其句法の平易なるは或は似たるべし。而して其趣向の淸婉なる處敏瞻なる處は元祿よりも天明に似たり。轉結之を言ひたるなり。

二　五百木飄亭

明治二十二三年の頃より多少俳句に心ざしゝ者五百木飄亭、新海非風の二人あるのみ。非風早く文學を廢し東西に流浪し俗界の人となる。殘る所只飄亭あり。飄亭の文學に於ける一種の天才あり、一たび文學趣味の上に大悟せし後は滔々數千言猶盡くる所を知らず、恰も大地裂けて熱泉湧くの勢あり。其俳句に於けるも亦然り。明治二十三四年の頃吾人の俳句は未だ俳句を爲さゞるに當りて飄亭の句已に正を成す。例へば

有明や白萩は露ばかりなり　飄亭
秋きらり〳〵野川の夕日かな　同
手水鉢にいつから沈む落葉かな　同

水仙の花に夜店の煙かな　飄亭

而して吾人が天保以後の極めて懈弛せる句法を學びつゝありし際に飄亭が始めて特得の伎倆を現し主として簡勁緊密なる句法を用ひたる一事は實に明治俳諧史の端緒として特筆せざるべからず。詳かに言はゞ吾人は梅とか鶯とか言へる一題を取りて其題許りを形容し一句を爲さんと企てしに飄亭は早く二箇以上の材料を配合し來れり。吾人は僅かに二箇の陳腐なる材料を取りて其配合の方法に多少の新意を出さんと企てしに飄亭は早く三箇四箇の材料を取りて之を一句の中に打ち込みたり。されば一句の中には「てには」少く名詞多く、句法に於て能く天保以後の陳套を脱したるのみならず、材料多きを以て其意匠も亦自ら清新なるに至れり。

例

菜の花や吉原田圃君歸る　飄亭

住吉は松の名どころ初霞　同

薄月の茨の花垣烟立つ　同

町淋し雨の筍貸家札　同

不二を背に夕山紅葉煙立つ　同

「君歸る」といふが如く五字の中に名詞動詞を入るゝこと、「茨の花垣」「夕山紅葉」といふが如く七字の名詞を造ること等明治に於ては飄亭の始めて用ゐし所なるべし。(曉臺、闌更に此句法多し)

飄亭大景壯觀を好む、瑣事微物を詠ずるを屑しとせず。故に其句亦壯大雄勁なる方に得る所多し。

青嵐の末は阪東太郎かな　飄亭

不動刻む大磐石や笞の花　同

大灘や月影高くいるか飛ぶ　同

薄原風ほう〳〵と入る日かな　同

風や壁吹き落す枕もと　飄亭

飄亭明治二十三年の暮、徵せられて兵役に服す。爾後三年軍營に起臥して文學研究の暇を得ざりしといへども其暇日なきは却て文學研究の念を熾ならしめし所以にして、且つ服役中俗累無きの一事は亦彼をして不便の中に幾何か文學研究の便を得せしめたり。されば二十六年暮、免せられて故郷に歸らんとする途中、碧梧桐、虚子を東都に訪ひたるや、今迄蓄へし文學思想は京都の勝景に逢ひて一時に爆發し來り數百首の俳句は口を衝いて出づるに至りぬ。其中に

松に入る僧や都の時雨傘（南禪寺）　飄亭

わが宿はつれ〴〵草の時雨かな（吉田里）　同

金屏の夢さめやすき時雨かな（金閣）　同

物の名の皆古びたる時雨かな（銀閣）　同

梅枯れて松の時雨の神さびぬ（北野）　同

水涸れて白蛇の塚の落葉かな（金閣）　同

ぬけて行く廣間々々の寒さかな（同　）　同

鴨川のからりと寒し京の町　同

風の都は青し東山　同

廿七年日清戰爭の端を開くや彼は豫備を以て徵集せられ看護長として第五師團に從ひ平壤を初とし九連城鳳凰城諸所に戰へり。俳人の從軍せしもの古に於て例なきは言ふ迄も無く今後亦多くあらざるべし。彼は此點に於て彼の傳記の上に色彩を施したるのみならず、彼が豪壯を好むの性は此千歲一事の好機會を得て幾多の佳句を作り出だしたり。中に朝鮮支那に於ける景色家屋等の特色を現はしたる者あり。

白露や朝鮮人の家低し　飄亭

一町はふくべばかりの空豆かな　同

女郎花虎伏す山の麓かな　飄亭
風の屋根裏低し　黍の殼　同

外國の事物を俳句の材料とせし者實に飄亭を以て初とす。其戰爭陣營等に關する句最多し。中に

白露や陣屋々々の灯のうつり　飄亭
陣更けて獨り胡歌聞く月夜かな　同
雨の萩野陣のあとの亂れかな　同
萩薄皆日本の御旗かな　同
骸骨の睨みあふたる尾花かな　同
小春日や陣屋々々の虱狩　同
筒音に白雪卍巴かな　同
劍を抜いて夢に敵斬る寒さかな　同
敗城の煙まれなり冬木立　同
國亡んで寺の正月僧もなし　同
しんかんといくさのあとの霞かな　同
陽炎や兵火の中に入る夕日　同
夏木立こゝもかしこも陣屋かな　同
馬洗ふつはものどもや杜若　同

鳴雪の枕靜なる光景を好むと反して飄亭の句には活動したる者少からず。

春風や赤前垂が出て招く　飄亭
折も折この煤拂にこの雪は　同
思ひ出して又飛び返る燕かな　同
鬚に霰あやうくとまりけり　同

飄亭は奇想を吐き新意を出だす事なきに非りしも、吾人の俳句變化を極めたる今

日に在りては彼の句法は平易なる一方に偏し彼の材料は壯大にして陳腐なる者のみを取るの傾向を生ぜり、要するに飄亭の俳句は變化に乏きなり。變化は俳句を作ること多きに從ひていよ〳〵其度を加ふる者なり。彼れ凱旋後俗事に追はれて俳句を作ること多からず。故に變化も亦少きものか。猶左に其作句數首を擧げて前に漏れたるを補ふ。

馬の首人の首行く菜種かな　飄亭
芭蕉忌や枯枝の句の鴉鳴く　同
蝶飛ぶや唐子乘せたる兎馬　同
今日となりて此行く年の惜きかな　同
三日月の古城淋し江の夕　同
冬枯の賓頭顱默たり木立寂たり　同
花の夕鐘の黑さよ大さよ　同
鍛冶祭向打殿は何の守　同
故郷の砧に似たる月夜かな　同
五六軒家さなりて雪の原　同
無住寺といつからなつてこの落葉　同
春風の京は錦襴鈍子かな　同
冬木立犬吠えて遠く里見えぬ　同

三　河東碧梧桐

河東碧梧桐が俳句なる者を認めたるは明治二十三年の頃なるべし。二十四年より作りはじめたるに其敏才ははやく奇想を捻出し句法の奇なる者を作り以て吾人を驚かしぬ。其頃の句

面白う聞けば蜩夕日かな　碧梧桐
手負猪萩に息つく野分かな　同
もう出でよ出でよと思ふ小鴨かな　同
狼や巨燵火きつき旅の宿　同

などの如き既に尋常にあらず。彼は少年を以て一躍して文學の海中に入り、たしかに手中に一個の寶珠を握りたるが如し。麒麟兒後來果して如何の佳句を爲すかと只進歩の程ぞ待たれける。されば明治二十五年には一段の進歩を爲し

我庵は粥の薄きを鶯を　碧梧桐
五つ子を酒の片荷や山さくら　同
春雨や一向專念の夜もありて　同
苗代と〻もにそだつる螢かな　同
蜘の子や親の袋を嚙んで出る　同
行水を捨て〻湖水のさ〻濁り　同
卯の花の咲く間はたゞの宿ならず　同
綱代守時雨にうとく老いにけり　同

等の句を爲す。此時は碧梧桐が思想に於て奇拔なる、句法に於て老成したる時代なり。實に此時代は吾人の思想此の如く奇拔ならず、吾人の句法此の如く變化せず此の如く老熟せざりしなり。明治二十六年に入れば熟練の上に一歩を進めたりといへども是れ尋常一樣の進歩にして碧梧桐としては驚くに足らず。例

元朝に月あり雪の梅の花　碧梧桐
木枯や水なき空を吹き盡す　同
しほりけり露と萩とになりにけり　同
露深し胸毛の濡るゝ朝の鹿　同
ものうくて二食になりぬ冬籠　同

水涸れて砂川白し冬木立　碧梧桐
牛の脊に小坊主細き雲かな　同
ちよろ〳〵と榾火の夢の何もなし　同
老の暮稜々として風骨清し　同

老の暮の句の如き長句は此時にありては極めて珍しきものなりき。碧梧桐如何に進歩したりといふも彼は猶丁年未滿の一青年に過ず。況んや其學餘机に據りて苦思する所の俳句は單に主觀の薄弱なる幻影を模捉するに過きず。況んや彼の文才を以てするも猶自家の經驗少く古人の書を見ず、經營慘澹無中より生じ來る所の俳句は固より其數に於て多きことを得ざりしなり。されば此年の暮、飄亭の來遊に遇ひ相共に携へて舊都の風光を觀るや飄亭が五歩に一句を吐き十歩に一句を吐くの手腕を見て碧梧桐は心暗に驚きしが彼の敏捷は直ちにこゝに悟る所ありたるが如く此時より翌廿七年の春にかけて又一歩を進めたり。例

春風や道標元祿四年なり　碧梧桐
桃咲くや湖水のへりの十箇村　同
上京や友禪洗ふ春の水　同
はつ櫻松のあはひに可愛けや　同
二かゝえ三かゝえの櫻ばかりなり　同
法皇の御幸になりし櫻かな(寂光院)　同
雨ふら〳〵大津出て來る燕かな　同
桐の花葵祭は翌とかや　同
雲の蜂眞赤になりて入日かな　同
小萩女萩根岸の里の女の子　同
雪ならん小夜の中山夜ならん　同

二十七年春以來彼は毫も進歩を爲さゞりき。曩時の麒麟兒も一個の豚犬と化し去

りぬ。由來彼は秩序的の能力と推理的の常識とを缺く者、少時に在りて敏才の人を驚かしたるは彼の不規則なる發達がたまゝ〳〵文學の方面に向ひしが爲めなるべし。薄弱なる彼の腦漿は平和なる時沈靜し居る時に當りて初めて用を爲すべし。一たび外部の刺擊に逢へば腦漿忽ちに混亂すべく混亂して後は殆ど狂の如く愚の如し。彼は修學のため一たび東京に來り二たび故鄕に歸り三たび京都に行き四たび仙臺に遷る。(是れ學校制度變更の結果なり)さらでも規則的の修學に適せざる頭腦は此大混亂に逢ふていかでか堪へ得ん。此年の暮退學して東京に來れり。明治二十八年は最早學課無く束縛無く詩人として如何樣にも發達すべき機會に遭遇せり。然れども其混亂せられたる頭腦は未だ沈靜せざるがため彼は平々凡々なる一年を送りたり。或は人をして邪路に陷るにはあらずやと疑はしむるに至りぬ。

其句

菜の花に汐さし上る小川かな　碧梧桐

三月を引くとも見えで波のうつ　同
春寒し水田の上の根なし雲　同
門を出て五六歩ありく春の風　同
畑中に梅折る人の見られけり　同
大佛の片手濡れけり朝さくら　同
やぶ入の淋しくもどる小道かな　同
四五本の棒杭殘る汐干かな　同
暗きより蚊の聲出づる庵かな　同
人の國に來てぞ似つかぬ更衣　同
遠花火音して何もなかりけり　同
イめばはらへば雪の戀衣　同

飄亭の壯大を好むと相反して碧梧桐の細微を好むを見る。例へば

すりこぼつわさびの水の緣なり　碧梧桐
摺鉢に蓮の浮葉の小雨かな　同
河骨の花に集まる目高かな　同

左の二句の如き稍句法の變化せんとするを見る。

八重山吹に雨そぼふるらしも　碧梧桐
吾庵は蚊遣すべく又せざるべく　同

左の一句の如き句法勁拔にして一種清新の趣味を具へたるを見る。

大寺やなるふつて夏の雨强し　碧梧桐

明治二十九年とはなりぬ。吾は昨年末昏々として睡眠に餘念無き俳友を起さんとして頻りに務めたり。而して第一に起き來りしは碧梧桐なり、最早腦漿沈靜したりとおほし。彼はたしかに一點の靈光を拜したるに相違あらじ。其俳句は一種の趣味を具へてしかも古人の言はざる處をのみ言へり。而して其句法一として勁拔ならざるはなし。

麥藁の虎が鳴くなり春の風(川崎)　碧梧桐
須磨の浦や月あたゝかき西曇り　同
境に入て國の禮問ふ霞かな　同
蕪村村に處し曉臺臺に登る春　同
聖や賢や竹林に愚や花の春　同
使して柳も見えず蜀の道　同
植木屋の海棠咲くや樓閣の中　同
つゝじ山茶店出したる村の者　同
短夜の大佛を鑄るたくみかな　同
五月雨に學校休む小村かな　同
黑船の動き出しけり雲の峰　同

雲の峰葱の坊主の兀と立つ　碧梧桐
寺による村の會議や五月雨　同
火串消て火を借る路の小家かな　同
機械場や石炭滓に葵咲く　同
街道に馬士の喧嘩や麥の秋　同
寺の内の小學校や樓櫚の花　同
森の中に出水押し行く秋の雲　同
墓多き小寺の垣や花木槿　同

此等の句は實に碧梧桐の特色にして去年の碧梧桐は未だ之を知らざりしなり。吾人も始めて此種の句を見たるなり。而して此句を讀む者皆其印象明瞭なるを認むなるべし。印象の明瞭といふことは多く餘韻といふことゝ相反す。鳴雪の餘韻を好むに反して碧梧桐は明瞭なる印象を好む。印象をして明瞭ならしめんとせば空間を狹くせざるべからず。空間狹ければ些事微物又は大事物の斷片を容るゝに過ぎず。故に碧梧桐の句には小事小物を詠ずる者自ら多し。

赤い椿白い椿と落ちにけり　碧梧桐
花蓮扇の芝は廣からず　同
褌で蚊遣して居る男かな　同
水飯の水こぼしけり膳の上　同
貧乏な青物店や夏大根　同
辷り落つる薄の中の螢かな　同
羽たゝきや繩に釣られし鶏のたけり　同

右の數句の如き空間極めて狹くしていよ〳〵印象の明瞭なるを見る。

水樓に夕立來べく待ち設け　碧梧桐
炎天の烏は鳶より也苦し　同

夏川や人愚にして龜を得たり　碧梧桐
水飯一椀冷酒半盞に僧を請ず　同
花薔薇の小さきを鉢植ゑにせし　同
桑は伐りしやがて麻刈るべき小村　同
蝸牛秋風殼を吹いて出でず　同

右の數句の如き異調の句は蕪村調より脫化し來りて從來の五七五調を去ること一層甚だしきを見る。是れ亦碧梧桐の特色なり。其外

音樂や船中流に春の風　碧梧桐
地震知らぬ春の夕の假寐かな　同
古き梅古き柳や小六條　同
中空にはやて吹くらん雲の蜂　同
門前の桐花咲いて日は高し　同
麥の秋盜人らしき者通る　同
外濠や水鳥一つ雪がふる　同
寐ざめして卯の花に聞く雨やらん　同
さまざまに狸化けんとぞ夜長き　同
不調子に踊つて居るよ小さい子　同
水害のまだ青い稻を刈つて居る　同

碧梧桐既に印象の明瞭なる者を好む。從て客觀の事物といへども壯大に過ぎて茫漠たる者を排す。況して主觀的の句に至りては殆ど全く之を排し去りて毫も取る所なし。是れ其性質の然らしむる者碧梧桐は始終此儘にて押し行くべし。故に其作句亦主觀的なるは極めて稀なり。

合點して酒にも醉はず暮の春（述懷）　碧梧桐
病中をさみだれといふ雨がふる　同

四　高濱虛子

高濱虛子は少にして碧梧桐と友たり其鄕里に在るも京都に在るも仙臺に在るも學校を同うし學科を同うし下宿を同うす。其高等中學を退きて再び東京に來るも亦二人の共に謀り共に決行せし所なり。此間虛子は碧梧桐に誘はれて俳句を作る。其俳句も亦相似る無きを得んや。二人の句初より稍似たる所あり。今日に於て猶其然るを認む。而して其初に似たる所は必ずしも後に似たる所に非るなり。蓋し初に似たるは虛子が碧梧桐を學びたる所少からず。後に似たるは共に琢磨し共に批評し共に進歩したるがためなり。然れども其相似たるは境遇を同うし修練をともにしたるの結果に外ならず。二人が天授の性質の相異は俳句の上にも相異なくして可ならんや。二人の俳句の異なる所は實に其性質を現す者なり。

詩人の頭腦に兩面の活動あり。一面は冷淡に社會を觀察し、他の一面は熱情を以てある事物に同感を表す。兩面齊しく發達する者無きにあらねど、多くは兩者孰れかに僻す。前者に僻するを寫實派と言ひ後者に僻するを理想派といふ。碧梧桐は冷かなること水の如く、虛子は熱きこと火の如し。碧梧桐の人間を見るは猶無心の草木を見るがごとく、虛子の草木を見るは猶有情の人間を見るがごとし。隨つて其作る所の俳句も一は寫實に傾き一は理想に傾く、一は空間を現し一は時間を現す。是れ二人の全く相異なる所なり。(俳句の性質として寫實理想共に之を極端に現すこと難し。故に俳句の上に微細なる觀察を施すに非れば相異を知り易からず。若し俳句以外の著作に見なば其相異は火を見るよりも明なり。)

碧梧桐の頭腦の不規則なる發達を爲すに反し、虛子は推理的の智識によりて秩序的の進歩を爲すを常とす。其弊は空理に拘泥して、自己が天然に有する感情を發揮することを妨げたり。されば明治二十四年に俳句を作り初めし以來二三年間は

其進歩捗々しからず、遠く碧梧桐の才思煥發せるに及ばざりき。然れども虚子は厚く志し深く思ひ孜々として勉め遲々として進む者なり。明治二十七年の春碧梧桐の俳句振はざるに至りし頃より虚子はやうやくに頭角を現しぬ。

明治二十五年の句

酒もすき餅もすきなりけさの春　虚子
湖や秋靜かなる瀨田の橋　同
枯蘆を漕ぎ出て長し瀨田の橋　同
傘かりて八瀨の里へとしぐれけり　同
傘さして行くや枯野の雨の音　同

明治二十六年の句

京女花に狂はぬ罪深し　虚子
花吹雪狂女の袖に亂れけり　同
宵の雲横川の杉にしぐれけり　同
冬空やからびはてたる天の川　同
初霜や吉田の里の葱畑　同

飄亭を留めて

京に寐よ一夜ばかりはしぐれせん　同

稍其熱情を現はせるを見る。二十七年は虚子が始めて詩神の幻影を拜したる時なり。俳句乳臭を脱して漸く老成の域に進まんとす。平易の中に趣味を寓する處に於て既に碧梧桐を超えたり。

裏道の橙赤し今朝の春　虚子
爐塞いで此夕暮を如何ん　同
夕暮の汐干淋しやうつせ貝　同
金殿に灯ともす春の夕かな　同

高麗人や春帆歸ること遲し　虛子
春の夕暮れんとしては小雨ふる　同
春雨の李夫人起きず香煙る　同
鹽竈や狂女死ぬ夜の朧月　同
菜の花や蝶群れわたる大井川　同
旅の夜の菖蒲湯ぬるき宿りかな　同
五月雨の大木多し木曾の山　同
子規鳴く頃寒し淺間山　同
大木に關屋の秋の入日かな　同
秋の海ばさりばさりと入日かな　同
此夕桐の葉皆になりにけり　同
みちのくの白菊遲き黃菊かな　同

富士見えて穭田靑き小春かな　同
冬枯の道二筋に分れけり　同
あたらしき藥屋もありて冬の村　同
大根干す柿の木の間の楷子かな　同

高麗人の句、みちのくの句の如き句法の奇なる者無きにあらねど其大部分は寧ろ平易の極なり。二十八年は猶前年の進歩を繼續せしに止まり、著き變動を見ず。

ふりつゞく彌生半となりにけり　虛子
あたゝかや蜆ふえたる裏の川　同
永き日を足弱つれて大和路や　同
彼岸會やもれじとくゞる阿字の門　同
追ひつくも後るゝも春の旅一人　同
刈株に小草花咲く春田かな　同

夕暮の大風下りにけり　虛子
春潮や海老はね上る岩の上　同
雉立つて小道盡きけり萍山　同
桃咲いてものぞゆかしき黃粉飯　同
木瓜咲いて藥いやがる女かな　同
手も足もおし埋む砂の淸水かな　同
風雲の梢ゆさぶる若葉かな　同
野菊莖ねぢけ葉うら枯れて花細し　同
しぐれつゝ留守もる神の銀杏かな　同
草枯れて夕日にさはるものもなし　同
寺町や土塀の中の冬木立　同
日は西にしぐるゝ阪の鳥居かな　同

日は西にといふ語後に多く用ゐらる。此句恐くは嚆矢ならん。

燒山の夕暮淋し知らぬ鳥　虛子

此終五文字に知らぬ鳥といふ句法極めて珍し。乙二の句に「夏霧に白い花」とある外に古句も見當らず。虛子之を擬したるならん。而して此句法は本年に入りて虛子の屢用ゐたる者なり。

明治二十九年が碧梧桐の俳句に一紀元を與へたるが如く虛子にも亦一紀元を與へたり。否寧ろ虛子が明治二十九年の俳句に一紀元を與へたり。本年の初に於て虛子は睡餘の眼をこすりて起ちぬ。何物をか捉へんとして未だ捉へ得ず、精神徒に激昂して熱情燒くが如く、頻りに空華水影を採り來りて神仙體等の句を爲す。

初暦妻めとる日も見當らず　虛子
河童身を投げて沈みもやらず朧月　同
怒濤岩を嚙む我を神かと朧の夜　同

羽衣の陽炎となつてしまひけり　虛子
雛より小き妻をめとりけり　同
この雨がふろとて屑の暖かさ　同
海に入つて生れかはらう朧月　同
花に豆腐味噌買ふことを忘れ男　同
田樂の腹春の風夢心　同
爐塞いで針見失ふこと稀なり　同

狂想亂調、珠玉粉碎して復收拾すべからざるが如し。夏に至りて精神稍沈靜したりとおほしく、半ば平易の句を爲し半ば新想異調の句を爲す。新想異調の句といへども春の句に比すれば稍其趣を異にす。例へば

月出で、鬼にもならぬ蚊遣かな（夕顏の卷）　虛子
古都の月子規でも鳴きさうな　同
短夜や遊女の顏の馬鹿げたる　虛子
短夜を隣の女房早起な　同
見つけたる野茶屋の鮓や蠅群れたる　同
鮒鮓や膳所の城下に浪々の身　同
植ゑられし門田あはれむ水淺み　同
むすべば濁る淺き淸水に値遇の緣　同
岩淸水誤つて唾す恨かな　同
子供多き鰥あはれむ田植かな　同
麥秋や貧乏寺の鐘が鳴る　同
靑薄萩の若葉を壓すべく　同
歸省して書齋なつかしむ澁團扇　同
夕嵐靑鷺吹き去つて高樓に灯　同

宿かりて蚊帳ごしに見る白き花　虚子
蚊帳ごしに藥煮る母を悲みつ　同
夕立や人咄しよりつ峰の堂　同
旅にして低き下駄なり五月雨　同
駄菓子店に鮓問へば無しと答へけり　同

此等の句法の勁健奇拔なる處は多く蕪村より出づ、而して更に蕪村を擴張したる者なり。「つ」といふ止めは去來に一二句あれども元祿前後に多く見ず。蕪村には五六句あり。「べく」といふ語は蕪村に二三句あり。之をはじめとなすか（「べし」といふ語は其角用ゐたり。其他にも多からん。「べう」といふ語は去來に一句あり。）「あはれむ」「なつかしむ」も蕪村の用ゐはじめたるか。「な」「たる」といふ止め、「旅にし」てといふ如き語、古句にありやなしや知らず。たとひありたりとするも極めて珍しき語なり。

秋に至りて此等の新想異調は全く調和して一種未曾有の新調として現はれぬ。

野の犬に殘飯くれてやりつ秋　虚子
削るが如き岩疊める如き雲の秋　同
牛の子の犬程なるよ今朝の秋　同
晝燭す羅漢の軸や秋の雨　同
狹き庭に芭蕉を愛す雨の朝　同
芭蕉植ゑて更にあはれむ雞頭花　同
芭蕉葉や團扇の塵をはたくべく　同
禿等に墨すらすべく月明なり　同
大竈寒蛩鳴て用ゐざる　同
蜻蛉になぶられて馬の長き顔　同
新酒のんで醉ふべくわれに頭痛あり　同

村夫子新酒釀し得たり口に髯　虛子
菊に燭して誰何す童子唐服す　同
緣日の菊苔がちに埃しけり　同

句法の新奇なる處は、前に言へりし特種の切字、動詞等と其外漢語の多きこと、漢文直譯的の文法を用ゐたること等にあり。

意匠の新奇なる處は、時間を含みたること、複雜なる人事を詠じたること、客觀中に一種小量の主觀を現したること等にあり。

時間を含みたる句にても

盜んだる案山子の笠に雨急なり　虛子
住まばやと思ふ廢寺に月を見つ　同
裏戸より借るべき家の菊を見つ　同

の如く過去又は未來の人事を詠じたるものは蕪村の句數首の外未だ曾て見ざる所なり。又複離なる人事の句にても

貧にして孝なる角力負けにけり　虛子
角力取に物とらすべくわれ貧なりし　同

の如く複雜なる人事の輪廓を與へたる者も亦未だ曾て見ざる所なり。(後の句の歐文直譯的の語法を用ゐたるも奇なり。)

此等の句が文學上に於ける價値は如何。此新調は俳句の生命をして多少長からしむる者か。此新調は俳句の範圍を越えて俳句以外に脫出したる者に非るか等の疑問は續々として起るべし。然れども吾はこゝに之を論ずるの餘地なし。只此等の句が意匠に於て句法に於て從來の俳句と面目を異にすることを紹介すれば足れり。吾は(碧梧桐の印象明瞭なる俳句と共に)此等時間的人事的主觀的の俳句が、蕉風檀林の外に元祿天明の外に、明治の新調を爲したるを喜ぶものなり。其外

遠城の左手に霞む野道かな　虛子

女等の濡れて戻りぬ花の雨　虛子
淺茅生に小き春の月出たり　同
山門も伽藍も花の雲の上　同
裏戸近く夕汐さすや茨の花　同
短夜を一番汽車の通りけり　同
短夜の雲しらしらと流れけり　同
柿の葉の蟻吹き落す野分かな　同
家鴨浮くや夕燒うつる秋の水　同
水ひたす彦根の城や星月夜　同
九日の白菊すこし咲きにけり　同

（自明治二十九年九月至十一月「日本人」に掲載）

（四年間附錄終）

大正二年七月十五日第一版印刷
大正二年七月二十日第一版發行
昭和二年六月一日第九版發行

編纂者　高濱虛子
發行者　東京市京橋區尾張町二丁目六番地　上川井良助
印刷者　東京市麻布區霞宮町二丁目十四番地　庄司助
印刷所　東京市麻布區霞宮町二丁目十四番地　常盤印刷株式會社

俳書堂號　友善堂
東京市京橋區尾張町二丁目六番地
電話銀座七三〇〇番振替東京六四九二番

定價金一圓八十錢

俳諧大要

正岡家著作權之章

俳書堂藏版之章

俳書堂藏版俳書發賣元
月刊俳諧雜誌發賣所
俳諧書籍專門取扱

俳書堂號

友善堂

東京市京橋區尾張町二丁目六番地
振替口座東京六四九二番
電話番號銀座七三〇〇番

新刊俳書陳列室常備
俳書年刊總目錄進呈

此の合卷を發行するに至るまで各書の重ねたる版歷左掲の如くなり。

俳諧大要版歷

明治三十二年一月十五日第一版印刷
明治三十二年一月二十日第一版發行
明治三十二年一月日第二版發行
明治三十二年月日第三版發行
明治三十二年月日第四版發行
明治三十二年月日第五版發行
明治三十四年十一月十日第六版發行
明治三十四年十一月十日第七版發行
明治三十四年十一月十日第八版發行
明治三十四年十一月十日第九版發行
明治三十四年十一月十日第十版發行

俳人蕉村版歷

明治三十二年十一月廿五日第一版印刷
明治三十二年十二月一日第一版發行
明治三十三年三月五日第二版發行
明治三十三年三月十五日第三版發行
明治三十六年六月十五日第四版發行
明治四十年十一月十五日第五版發行
明治四十二年十一月一日第六版發行

俳句問答上卷版歷

明治三十四年十二月十一日第一版印刷
明治三十四年十二月十五日第一版發行
明治三十四年十二月十五日第二版發行
明治三十九年十月十五日第三版發行

俳句問答下卷版歷

明治三十五年二月十九日第一版印刷
明治三十五年二月廿一日第一版發行
明治三十九年十月十五日第二版發行

四年間版歷

明治三十五年四月十五日第一版印刷

合本俳諧大要版歷

大正二年七月十五日第一版印刷
大正二年七月二十日第一版發行
大正四年三月三十日第二版發行
大正十四年十月十五日第八版發行

明治四十年二月十五日第四版發行
明治四十一年六月廿五日第五版發行
明治四十二年十月一日第六版發行

明治四十年二月十五日第三版發行
明治四十一年八月廿五日第四版發行
明治四十二年十月十日第五版發行

明治三十五年四月二十日第一版發行

大正九年十一月日第五版發行
大正十年三月一日第六版發行
大正十一年二月二十五日第七版發行

昭和二年六月一日第九版發行

338
ه
191

終